

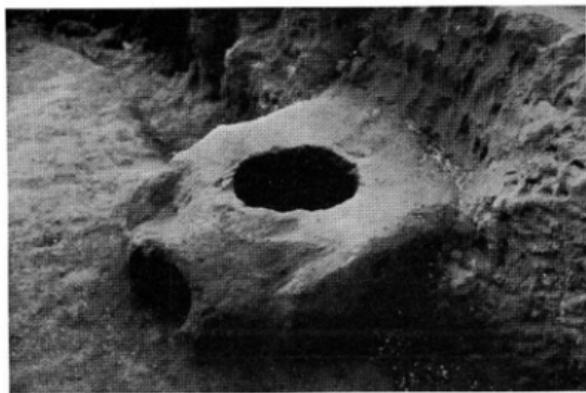
茨城県

原遺跡発掘調査報告書

玉造町教育委員会



霞ヶ浦にのぞむ ふるさと玉造



上：「こしき」（井川芳男氏蔵） 下：「かまど」（原遺跡出土）

発刊のことば

玉造町長 坂本常蔵

玉造町は、霞ヶ浦と北浦にはさまれた行方郡の西北部に位置している。

東部及び北部一帯は海拔三五メートル内外の丘陵で畑作地帯、南部及び西部は霞ヶ浦の湖面に沿って水田地帯となっている。また、町のほど中央を堀無川が貫流している。

水と緑に囲まれた当町は、早くから文化の開けた地域で、日本武尊をはじめ、幾多の伝説・史話を秘めている。また、古代人の生活の代表的舞台として、「常陸國風土記」に詳しく述べられ、「万葉集」にも、よく詠われた地域である。

このように、歴史と伝統に満ちた当町には、現在、原遺跡をはじめ、六〇をこえる遺跡がある。遺跡は、私達の祖先の生活や文化を理解する上で欠くことのできない貴重な遺産であつて、かけがいのない国民的財産ということができる。

それ故に、現存する遺跡を保護することは勿論、これを正しく後世に伝えることは、私たちに課せられた大きな責務である。同時に、私たちは常に郷土の繁栄と住民の幸福を念願し、よりよき将来を創造するために、「古きをたずね新しきを知る」悔のない努力を続けなければならない。

このたびの発掘調査は、原遺跡付近が、総合運動場建設事業の工事対象区域に当るため、緊急に実施し、記録による保存を図ったわけである。

こゝに、発掘調査の結果をまとめた報告書が刊行されることになったことは、喜ばしい限りである。

この報告書によつて郷土の歴史の一端が理解されると同時に、文化財愛護のために、十分活用されることを念願して止まない。

発刊に際して

玉造町教育長

渡辺正則

「常陸國風土記（日本古典文学体系、岩波）の行方郡の一節に「郡より西北のかたに提賀の里あり。古佐伯ありき。手鹿と名づく。其の人の居たれば、追ひて里に着く。其の里の北に、香島の神子の社あり。社の周の山野は地沃えて、柴・椎・栗・竹・茅の類、多に生へり。此より北に、曾尼の村あり。古佐伯ありき、名を疏織毗古といふ。名を取りて村に着く。今、驛家を置く。此を曾尼の驛と謂ふ。」とあり、同書は、玉造町の古代史を解明する上で貴重なよりどころになっていることは周知のとおりであります。

さて、このたび発掘調査いたしました「原遺跡」は「埋蔵文化財包藏地地名表」（No.一五二〇、茨城県教育委員会）に記載されている周知度の高い住居跡で、今から千数百年前のものと思われます。また、古くから、地元の人々から長者平として、伝承されてきた所であります。

今回の発掘調査により、いくつかの新しい事実が明らかになりました。

まず、この台地の利用は遠く、約六千年前に溯源することが、尖底深鉢形土器の出土により、縄文早期に比定されることから判明しました。

次に、土師器や須恵器が多数出土したことであります。以前よりは、土器の特徴による分類が可能になると思われますが、完成品がないことや、住居跡に伴うものか否か明確でないこと等により、時代比定は、後日の調査報告に依らなければなりません。

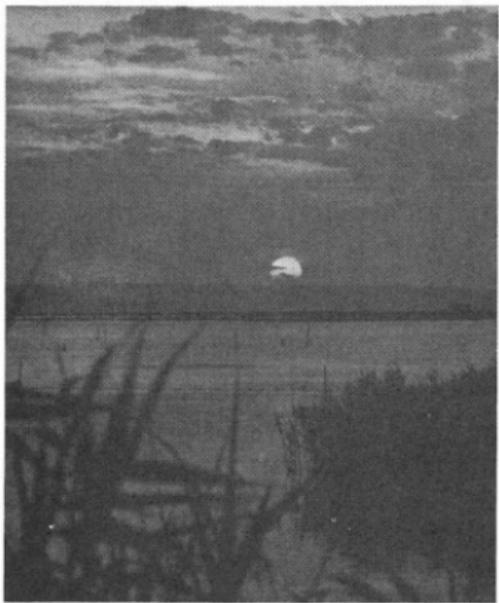
たゞ事実報告として、若干、言及するならば、土器では、土師式土器の編年で、鬼高・真間・国分式に比定できる杯（器形）が出土しています。このことは、奈良・平安期を中心とした時代に生活が営れた証しとなります。

その他、高台杯（土師）とV字状の口縁を持つ斐形土器・黒色土器も出土しました。

また、「かまど」（現物保存展示）の出土も注目の一つになっています。

発掘現場の丘の上に立ち、出土した品々を前にするとき、当時の人々が必死に生活を営んでいた様子が目に浮かびあたかも当時の生活の中にいるような錯覚におちいります。

なお、末尾ながら、本発掘調査及び報告書作成にあたり、多大なる御尽力をいたゞいた海老原　幸　先生の御熱意に、衷心より厚く御礼申し上げるとともに、今回の発掘のために、快く御協力くださいました地元の方々や関係諸機関の各位に厚く御礼申し上げ御挨拶といたします。



「浦のあけばの」

「春霞

かすみの浦を

行く舟の

よそにもみえぬ

人をこひつつ

藤原定家

(新後撰集)

目

次

原遺跡について	海老原幸	7
一、はじめに		7
二、原遺跡の周辺をみる		7
(+) 地理的にみて		7
1. 地形からみて		7
行方台地の特色		7
2. 地質からみて		7
泉集落の地質		7
(1) 農業用水と長者		7
谷津と湖岸の水田		7
(2) 古墳と地域文化		7
古墳の分布と集落		7
常陸國風土記と農耕文化		7
(3) 伝承と古墳時代		7
三、発掘調査の動機		17
四、発掘経過		17
五、住居跡		10
(+) 歴史的にみて		10
1. 長者平 (A 地区)		10
長者平の遺構		10
2. 集落群跡		9
発掘の経過		9
六、土器 (生活用具) のいろいろ		17
(+) 発掘計画		17
1. 長者平		17
2. 集落群をみる		17
3. 古墳群 (二基)		17
(+) 実施計画		17
1. 長者平		17
2. 集落群跡		17
(+) 発掘の経過		17
1. 長者平 (A 地区)		17
No. 1 号点		17
No. 2 号点		17
No. 3 号点		17
(+) 原遺跡 (B 地区)		17
No. 1 号住居跡		17
竈について		17
瓶について		17

木の葉の圧痕のある土器	1.
浅い环	2.
深い环	3.
壇	4.
脚付皿	5.
土がま	6.
土師器に須恵器の技法を採入れた土器	7.
須恵器の蓋の「ツマミ」	8.
須恵器の模様	9.
須恵器の甕の整形	10.
須恵器の蓋の模様	11.
須恵器の低辺部の整形	12.
糸切底	13.
脚の付け方	14.
骨壺と蓋	15.
出土土器に関する覚え書	16.
高埜栄治	1.
73	73
73	46
	45
	45
	37
	36
	36
	36
	36
	36
	35
	35
	35
	34
	34
	34
	34

73 73 73 46 45 45 37 36 36 36 36 36 36 36 35 35 35 35 34 34 34 34

照葉樹林とは	三
古代の身近かな植物	四
風土記や史記などにみられる植物	四
食糧としての植物	四
生活を潤おす植物	四
食事に関する植物	四
薬用植物	四
食用としての山菜・野草	四
住居の材料としての植物	四
生活のちえとして	四
神祭と植物	四
自然を友として	四
万葉集にみられる植物	四
秋の七草	四
春の七草	四
出土する植物化石をみる	四
葉底土器にみるもの	四
木の葉の圧痕のある土器	五
ボンベイの遺跡を尋ねて	五
泉原の現在の植物は	五
現在の植物の姿を眺める	五
常緑照葉樹が多い	五
食べられる木の実・山菜が多い	五
はじめに	一
古代の自然と人間の生活	二
古代の植物	七、唐ヶ崎長者について
1. 長者屋敷	1.
2. 布目瓦	2.

88 88 88 87 87 87 85 85 85 84 84 83 83 81 80 80 79 79 78 78 76 76 75 74

六

- 3 民間薬や毒草のなかまも多い
4 分布上珍らしい植物を見る
5 墓化植物が今までの植生を変える
6 名前の由来の面白い植物
7 可憐な野草はまだ残っている
口 結び
口 お爺さんは山へ柴刈りに
物が栄えて山林滅ぶ

編集後記

103 94 93 92 92 91 90 89 89

遺跡の発掘に参加して



原遺跡について

二、原遺跡の周辺を見る

(一) 地理的に

海老原 幸

1. 地形からみて

(1) 行方台地の特色

「常陸國風土記」に記述されている、疏^{キラガ}之^ノ古^{ハシタ}の生活領域である「曾尼^{カニ}の村」にある、長者平^{カミヤマヒラ}・原遺跡^{ハラノミサキ}の調査であるから、次の点に留意して調査したのである。

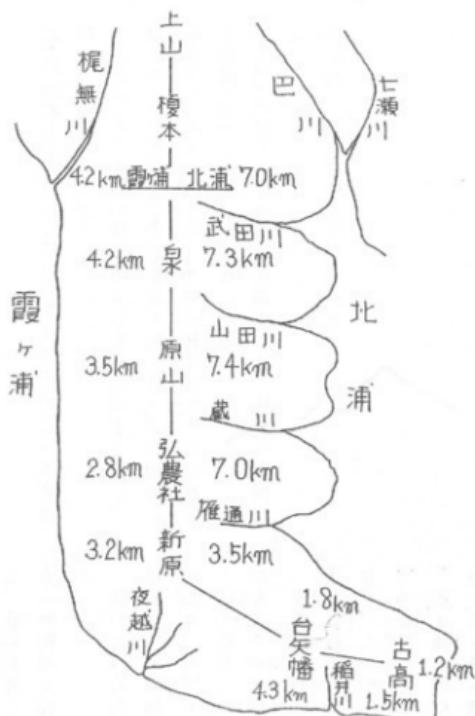
1. 「常陸國風土記」の行方郡の条を解説する時の、参考資料として役立つこと。
2. 奈良時代までの生活様式が少しでも判明すること。
3. 提賀の里の条に「草木は柴・椎・栗・竹・茅の類多く生える」とあることから、当時の植生状態と今の植生を比較して、植物の変移などをみる。
4. 生活用具の土器類を緻密に調査して、特色を把握する。
5. 曾尼^{カニ}地方の文化程度を判明させる。

従って行方台地は、北浦と霞ヶ浦の間に突出した一大半島で、分水嶺部の標高は、上山で 341m 、榎本で 333m 、原山が 356m 、卒塚が 336m 、弘農社で 341m 、麻生町の新原で 370m と高くなり、これより東部に亘って台矢幡で 400m 、潮来町の古高で 387m となっている。

これらの地点から、北浦と霞ヶ浦への距離をみると、分水嶺は行方台地の西寄りを、上山・榎本より新原にかけて通り、ここから東寄りに走って、台矢幡から古高に行くのである。

霞ヶ浦の湖岸線は、単調で変化に乏しいが、湖岸の微高地には集落が構成されており、広い水田地帯には、農家の点在する地域も見られる。

No.1図 行方台地の引水



Sp No.1 梶無川

- 8 -

分水嶺と湖岸の距離が40km以内であるから、樹枝状の谷津が発達して、湧水は西南西に流れているが、谷津と湖岸沖積地に、早くより水田が開発されているから、用排水路の域を脱していない。

東側の台地は、分水嶺と北浦の間が7.0kmもあるから、樹枝状の谷津も発達しているが、ここからの排水路としての川も造成され、川口は入江の頭部に在り、ラッパ状の入江が在れば、必ず入江の頭部に小川が開口されている。武田川・山田川・藏川などがその例である。

南々東の流路が途中から東寄りに変り、各所からの水を集めて、北浦の入江に放出するのである。入江と小川が、行方台地東部の特色である。

麻生から延方にかけての間は、麻生の入江・牛堀の入江・潮来の入江もあったが、早くより横須賀が造成されて、集落がつくられ、古墳の築造もされるに至ったから、湖岸は単調であるが、大集落が構成されて、水上交通の要地となつて来たのである。

水路は、夜越川・稲井川の様に南流しているのが多い。

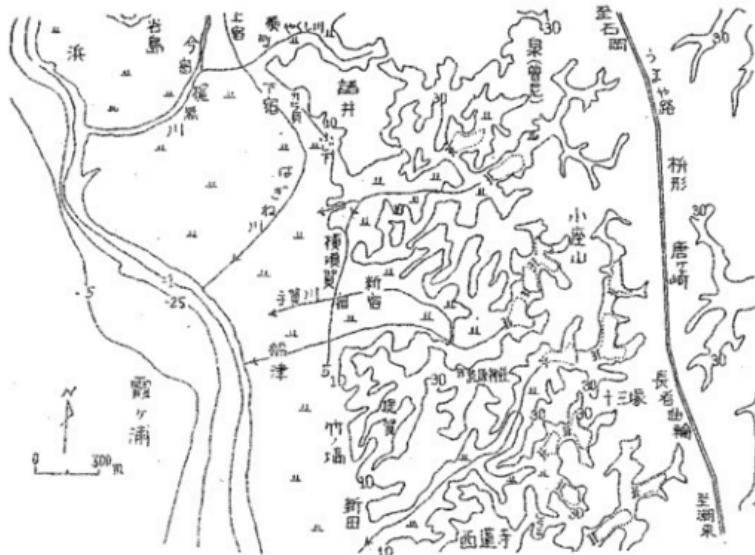


図2 手賀、泉付近の地形図

等高線は5m(1部のみ) 10m・30m。水深は-1m・-25m・-5mを入れた。
記号は灌漑用水池の堤である。

(2) 手賀の入江

手賀の入江の江口巾は、台地間で625mを測定することができ、5mの等高線は、台地間を直線で結んでいる。この等高線は、手賀の入江口にできた「スカ」の成態を示すものである。須賀の直線であるのは、湖岸の微高地が、平穏な年月で造成されたのである。更に内部からの流水などの欠損による変化のなかったことは、ハス池・中池などの農業用貯水池が、湧水や降雨を貯水する調整池の役割を果して来たからである。

集落は順調に発展し、集落の名称は横須賀でもよかつたが、地理的発展から「宿場」形態になつたので、「宿」の地名が生れ、更に「新宿」も発生したのである。

道路は等高線の東約50mを走り、その左右が集落地になり、台地集落と船津及び南北集落の中継地点であり、文化経済の中心地ともなつて來たのである。

(3) 曾称の入江

曾称の入江の江口巾は500mと測定される。5mの等高線は道路に沿うてゐるが、No.2図で判斷される様に、大きな変化がみられる。これを「ふじ下」から順次みると、道路から75mも離れていた等高線が、巾75mで70mも接近するのである。次いで巾50mで150mも西に突き出し、更に巾25mで125mも道路に接近するのである。等高線は再度、巾100

長さ 17m も西に突き出して、更に鳥名木台地に向って湾入し、道路に 10m 近接すると、30m・75m と離れて「横須賀」に入り、接続する宿の集落へと向うのである。

中央の巾 25m の入り口みは、最近迄の水路であるから、浸食流出の結果とみられる。

5m の等高線が生成時を、「ふじ下」の 75m から、150m・175m の中央部と、鳥名木の 75m を結ぶ放物線が想定されるのである。とすれば、北側の巾 75m の湾入と、鳥名木側の湾入は何によるのか。

鳥名木氏が、池の大ハツ目船^を、娘の仇とばかりに射殺すと、船があはれて池堤が決壊する、雷鳴轟き豪雨となつて、丘は崩れ人家も流された。この時に流されたのが「流れ権現」や「高須の松」であり、「流れ」の地名も残つてゐると伝承されている。

堤の決壊は、谷津口に築堤した池が一つだけであったから、集中豪雨のために決壊したのである。小座山周辺の谷津に在る池は、三ヶ所以上が連続しているから、豪雨になつても鉄鉋水の心配はないのである。

泉の天竜谷津の場合は、池堤から 15km の上流に 1.4 平方 km の集水地域があり、その他の水と合流して、谷津巾 50m から 75m に集中するのであるから、堤の決壊は当然であったろうと考えられる。

曾^をと鳥名木^{（ハサキ）}の争で、曾^をが敗れたのと、集中豪雨による池堤の決壊が、物語りとして伝承されて來たの

であると考えられる。

2 地質からみて

(1) 泉集落の地質

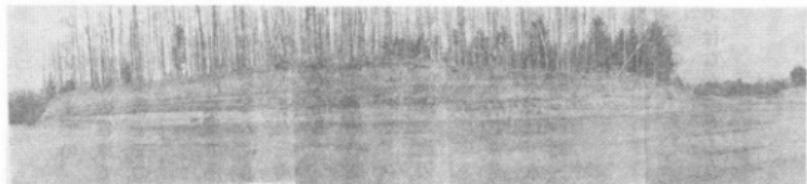
泉集落は行方台地の北部に在り、標高は、上山の 342m・櫻本の 330m から、泉の 351m・360m・「折がた」・「唐ヶ崎」付近で 359m と変化している。泉の西で 340m・「はじめ」で 338m である。長者平の 33m から原遺跡の 35m となって、35m の平坦地に泉集落が古来より構成されているのである。

「長者平」で地層をみると、No.3 図と写真にみられる様に、薄い表土と 18m 余のローム層があり、次に青白色層・白色層の粘土層が水平に広がつており、その下に赤褐色の粘質砂土がある。この下は、標高 10m 近くまで、砂礫層になっている。

「長者平」では、粘土層からの湧水を利用してたらしくて、一ヶ所凹地に水が溜つていた。百里街道（鹿島街道）に長者屋敷があり、井戸が在り湿地の多かつたのは、田水を利用していたのである。唐ヶ崎（唐ヶ崎長者）の野村氏は開拓当時の数年間は沢に井戸を掘つて、溜り水を利用していたとのことであるが、今は地下 40m の深井戸を掘つて、飲料適と毎年保健所より証明されている。根氏 15° 美味な水を生活用水に使用しているのである。

長者平の地層写真で、表土とローム層下の三層は粘土層である。平坦地（削土した平坦地である）は砂地であり、

これに接する崖の白い所は砂層である。



写No.1 長者平東北部の断面
No.3図を参照して見て下さい



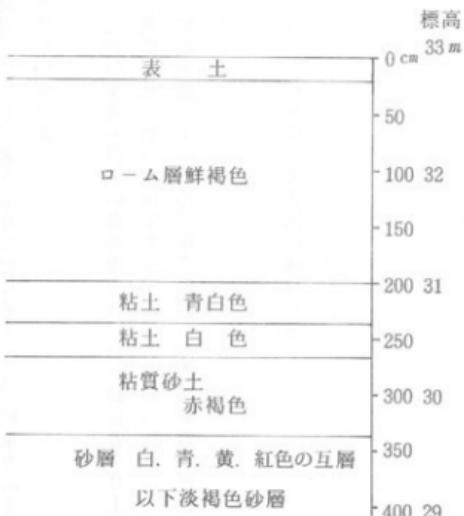
写No.2 分水嶺の東側にある長沢池跡
ショウブ、ミソハギ等の水生植物が多い

No.4図 長者平入口の地層

標高	
ローム層	鮮褐色
粘土	白色
粘土	黄色
粘質砂土	褐、白、紅色の互層

ローム層が流出している。

No.3図 長者平の地層図



5m の等高線から 30m までの、天童谷津・鳥名木谷津・う

ばが谷津などは、曾称の谷津であり、水田となつてゐる。

5m の等高線から高須集落までの水田地帯は、曾称の湖岸とみられる。

谷津と湖岸は共に冲積地であるが、曾称の谷津は、曾称谷津自体の土砂によるものであるが、曾称の湖岸は、魂無川が多量に流出堆積させた三角洲に、曾称谷津からの流出土砂が合体したものである。

従つて水田耕作は、谷津の開田に始つて、順次湖岸に開発の手を伸していつたので、「蒲田」は蒲の自生地を開田した呼び名であり、海辺・海辺新田は、海辺つまり湖岸の新田の意である。

谷津田の耕作は、湧水で等高線 6m 位迄は灌漑ができるが、等高線 5m から湖岸の水田は、水不足になるので、魂無川の水を引く、谷津に「堀ヶ谷池」などを設ける必要があつたのである。

築堤による農業用水池の建設・用排水溝の設計施行は、誰が中心になつたのか。考えられることは、曾称の長者・唐ヶ崎長者達ではなかつたろうか。

当時の村落を示すと次の通りである。

〔常陸國風土記〕をみると

「都より西北に、提賀の里あり。古、佐伯有り、手鹿と名づく。其の人の居為れば、追いて里に着く。其の里の北に、鹿島の神子の社在り。社の周の山野は地沃い、草木は椎・栗・竹・茅の類多く生る。

此より以北に、曾尼の村あり。古、佐伯有り、名を疏称尾古と曰いき。名を取りて村に著く。今、駅家を置く。此を曾尼の駅と謂う。」

提賀の手鹿・曾尼の疏称尾古は、唐ヶ崎長者や井上長者と共に、其他の豪族であり、指導者であつたから、地域住民の生活向上のため、産業振興のために努力したと考えられる。

1 農業用水池と長者

No.5図 「常陸國風土記(行方郡)にある村落

・部族の長



2 古墳と地域文化

(1) 古墳の分布と集落

曾称地域で古墳の分布をみると、西南部の台地末端部に「大塚古墳」と、「長者平」の近くに「方墳群」がある。泉集落から愛宕神社に行く山林中に、三基の小円墳群がある。

集落の東方で百里街道に近い所に、八基の円墳群がある。

七基は、径 $4m$ から $5m$ の小円墳であるが、東側の一基は径 $20m$ 高さ $4m$ 余の大円墳であった。
百里街道（鹿島街道）の東側で、戰後に十余基の火葬墳を、 $60cm$ ～ $90cm$ の地下から発見しているのである。

桑苗を定植するのに、機械で穴を掘っている時、次々と掘出されたが、完形品は少ないし、壺の中には灰の様な土があつたとのことである。
残っていた蓋は、No.57図の須恵器であるが、話を総合すると土器の色などから、土師系統の壺であると判断され、

形は円筒形に近い壺で、蓋が全部あつたかどうかは判明していない。円筒形状の骨壺用の土器であり、土師系統が大半であり、須恵器もあつたのか、在る物を利用したのかわからぬ。

問題は、火葬が早くより実施されたことである。壺の周

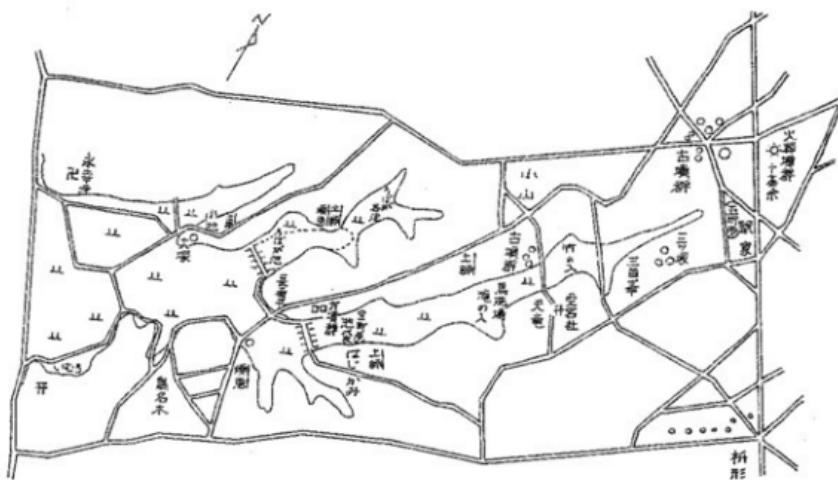
圍には、粘土・木炭がつめられていた様であつた。

三百峰には、三ツ塚と呼ばれた、円墳三基があつた。三百峰は三百の蜂か、三白食が三百峰になり、三百峰となつたのか。僧食の三白食に発するトすれば、三白食の人々の居た蜂とも考えられて、米を常食にする人々の居住地であったのである。

次に村落であるが、「曾尼の村」の区域はどうだつたらうか。泉に続く台地上の「諸井」は、同一生活域内であるから、曾尼村の一部とみられるのである。谷津の北方台上に在る「ぶつたいし」は、縄文中期以来の集落であるが、古墳時代が不明であるから、今は広くても、泉から諸井にかけての台地を、「曾尼の村」としておきたいのである。次に疏縄尾古の居住地と曾尼の集落はどくか。

集落は、泉から諸井にかけての平坦な台地上であるとみて、その中心地は、泉の原遺跡であり、並木農園から北部周辺でなかろうか。古墳が東部と西部に在る点から、疏縄尾古の居住地も、集落の中央でなかつたろうか。

No. 6 図 泉の地名と古墳



(2) 「常陸國風土記」と農耕文化

施行地区で、耕地関係の記事をみると。

鹿島郡では、

「白鳥の里あり。古老の曰いしく、伊久米の天皇（垂仁天皇）の世、……石を湧いて池を造り、其の堤を築かんとして……得作成さざりき。」

行方郡には、

「田の里と名づく。息長足日亮の皇后（神功皇后）の時、此の地の人、名を古都比古と曰う。三度韓國に遣されしかば、其の功勞を重みして、田を賜りき。因りて名づく。」

「右村の玉穂の宮に大八洲所取天皇（繼体天皇）の世に、人有り、箭括氏・麻多智といふ。郡より西の谷の草原を點て、擧闢きて新に田を治りき。」

「雞波の長柄の豊前の大宮に塙軒天皇（孝德天皇）の世に壬生連慶、初めて其の谷を占めて、池の堤を築かしめき。」

「其の地を鶴野と謂う。：野の北に、櫟・柴・鶏頭樹斗の木、往往森々りて自ら山林を成せり。即ち耕の池有り。此は高向大夫の時に、築く所の池なり」

白鳥の築堤は垂仁天皇の頃には、農業用水の確保を必要としたということで、行方郡にも初の圧痕から考へて、築堤があつたろうと思われる。神功皇后が田を賜った、田の里にもこの頃の用水池があるのでなかろうか。

繼体天皇の頃にも、未開発の谷津があつたので、開拓を始めて百余年過ぎて、谷津全体が開田されたのである。この頃には、湖岸の開発も進んだらうから、水不足解消の為に用水池を構築することになったのである。この頃に「耕の池」も設けられたのである。

初の圧痕は。

1. 玉造町小鹿山出土の須恵器に人有り、箭括氏・麻多智といふ。
2. 潮来町潮来出土の弥生式土器に擧闢きて新に田を治りき。
3. 錐田町飯名出土の土師器
4. 神栖町鳴子塚出土の土師器
5. 神栖町ふた子塚出土の土師器（11粒）

焼米では、鹿島町片岡台の郡家跡より、昭40年に多量の
焼米が検出された。

鹿島郡では、農耕石斧が、北部の縄文中期遺跡から多量に検出されているから、行方郡でも、農耕は縄文のむかしから始つて、古墳時代になると水田耕作と築堤が盛行し始めたのである。

(3) 伝承と古墳時代

八ツ目鰐の伝承 手賀小学校の郷土史に、「鳥名木八ツ目鰐」の伝説として、

時は元亀天正の頃とかよ、……嗚呼姫は遂に取り喰はれしなり。此の池に長く棲める悪魔八ツ目鰐のために……娘の仇報いで置く可きかと……長さ数十尺もあらんかと思はるる一匹の大八ツ目鰐が……鳥名木城主大に悦び強弓に矢つがい……真額深く射込みたり。四苦八苦悶くよと思う間に、狂瀾丘を洗い、怒涛崖を拂ち、黒雲湧き豪雨降り電光閃き百雷轟き天地晦瞑たり。……高堤の一角ために潰裂し、池水奔流山を崩し、家を流し、木竹人馬の流出せしもの算なし。……轆轤大にして其のまま運び去らん術もなければ、斬ち切りて馬もて運ばせけるに、実に其量十三駄片荷あり、之を葬り塚を築く、十三塚とて今に十三個の古墳を存する

はこれなり。

十三塚は、No.2図の地名で、十三の古墳があつたから、「十三塚」と呼ばれて来たのである。この時の八ツ目鰐の首は、No.6図にある「首塚」に葬つたのである。

八ツ目鰐の首と軀体を別々に葬つたことは、後難をおそれてのことと考えられるが、首塚は「となぎ谷津」の水田中に在り、十三塚は手賀の「権太夫池」の東南台地にあるから、何か考えさせられる。

八ツ目鰐とは、曾称の豪族であり、鳥名木城主は手賀の豪族であるとみれば、両者の争で、曾称は戦に敗れたのであり、堤の潰裂は防禦作戦であったとも考えられる。

首塚の在る所は、鳥名木内地内であるから、戦争中に戦死した、手賀一族の主将の一人であり、十三塚は、手賀一族の古墳としても、別個のものでなかろうか。

手賀の豪族に関連したこと、手賀の権太夫池と北浦村山田の「なぶつが池」との伝承がある。手賀の郷土史にも、古來「権太夫池に大蛇接めり。山田「難物池」の大蛇と夫婦にして、彼は雌なり。とある。

「権太夫池」と「なぶつが池」は、同盟を結んでいたから、常に連絡し合つて、他の豪族に対抗して来たのである。「なぶつが池」の鰐（地元では鰐といつて）は、小幡の豪族に亡されたのである。敗れた鰐は、首は台地の根方の水田に埋葬されて、首塚といつて。この首塚からは、直刀・石枕（滑石系統・立花孔一一・京都大学蔵）土

師片が出ていた。鎌は山田付近を領有した豪族であり、直刀（三振と伝う）と立花11ヶで飾られた石枕を持つ権力者であった。

従って、手賀の権太夫池の大蛇も、手賀の豪族である。

鳥名木の蟹の言塚もまた、古墳に埋葬される豪族の一員であるとみられる。

これらの伝承は、何れも古墳末期頃の、玉造町、北浦村周辺の情勢を物語るものであるとみるべきでなかろうか。

前にも述べたように、池堤の潰裂は、集中豪雨によるものであつて、豪族間の争をからませて、面白く粉飾されたものと思われる。

三、発掘調査の動機

泉集落は、「常陸國風土記」にある「曾尼の村」に該当するから、疏称鬼古の居住地であり、領有地域もある。従つてこれらに関連する、古墳や集落群があるのである。

玉造町で、町営総合運動場を、長者平から原にかけての山林に造営するに当たり、前記の地は原遺跡の一端であり、長者平は、屋敷跡か築跡ともみられるから、次の計画に基いて調査することになったのである。

四、発掘経過

(一) 発掘計画

1. 長者平

(1) 建屋の配置と構造を見る。

(2) 広場の状況を見る。

(3) 正門と防禦（犬走り・土塁・壕井戸など）を見
みる。

2. 集落群を見る。

新設道路の側に、方墳一基があるので、調査を
計画した。

(二) 実施計画

実施が入山に遅れたので、工事の進展から、調查を
計画した。

実施が入山に遅れたので、工事の進展から、調查を
計画した。

1. 長者平

(1) 篠屋裏の利用度を見る。

(2) 小平地の利用度①久保地の上

②突出部の上

2. 集落群跡

(1) 駐車場工事完了のため、トレーンチ一本で、住

居跡二戸を想定する。

3. 方墳の調査は、工事に直接関係しないから、放棄する。

〔三〕 発掘経過

昭 57. 5. 14. 長者平の削土残地に三区設定

昭 57. 5. 15. No 1 -15 cmまで下げる。

No 2 -10 cmまで下げる。

No 3 -10 -15 cmまで下げる。

降雨のために午後は中止する。

-30 cmで土器が出土する。

No 1 -40 cmで地山となり、土器の小片数ヶ検出

No 2 -60 cmまで下げ、断面図をとる。土師・須恵の小片のみ。

No 3 -60 cmまで下げ、断面図をとる。土師・須

恵の小片のみ。

昭 57. 5. 16. 若妻会員が一日研修で主力となつたので、B

地区の集落跡を発掘する。

1. B地区北寄りに2巾のトレーンチ一本を設定す

昭 57. 5. 17.

1. 終日掘り下げる→清掃する。

No 1号住居跡の概略がわかる。

2. No 14区・No 16区で、柱穴と土床が判明してき
た。

昭 57. 5. 18.

No 1号住居跡で

1. 側壁を5cm位残して、掘り下げる。

2. 午後に土器片をあげる。

3. 側壁の残土を削り、溝も出す。

4. 土床を清掃して柱穴を検出。

5. 出入口の削土をする。

1. カマド完了↓実測する。
2. 一切完了したから、写真を撮る。
3. No 2号住居跡は、複合であり、削土されてい
るために判然としない。

る。長さ40mの所に二戸想定し、他は削土後の盛土である由につき、除外した。

-30cmは粘質土の盛土で、駐車場のために堅めてあつた。

No 3で、住居跡の出入口と柱穴とおぼしきもの検出したから、拡張準備する。

昭 57. 5. 20.

1. 土器片洗をする。

2. 翻痕を探したが検出されない。

3. 葉底は数片あった。植物談義。

4. 明日のために長者山を見る。

五、住居跡

(一) 長者平(A地区)

昭 57. 5. 21.

1. 原遺跡の実測

2. 長者山のNo.1住を拡張する。

3. 長者山の出土状況より建屋跡と想定した。

3. 午後三時より反省会

昭 57. 5. 24.

No.1号住居跡の「カマド」を切取る。

昭 57. 5. 25.

土器洗い・拓本・復元図作製

昭 57. 5. 24.

渡辺教育長らと、駅家・唐ヶ崎・戸羅戸など
の調査をする。

昭 57. 5. 27.

堤一郎氏の案内で、布目瓦を、唐ヶ崎・小座山
に探る。

昭 57. 6. 4.
5. 6. 3.

切り取った「カマド」完成。
①は(第7図を参照)、長者平を南西から横断したもので、最高部が建屋跡、一段低く広い所が広場である。出入口の正門は、南東部にある。「犬走り」もみられる。
EFは北西部からみたもので、建屋区域は中央の高い所であり、広場は前庭の一一番広い所である。「犬走り」は二段に

長者平は、西に「うばが谷津」、東に「天竜谷津」、前は「鳥名木谷津」で、鳥名木台地に対している。標高は30m以上が主で、T字形の台地であるが、中央部には33mのし字形台地があるので、ここを建屋区域とすれば、31mから32mの平坦地は、長者屋敷の広場とみることができる。出入口は泉台地との関連から、東南部の突端、31mの等高線に囲まれた所であった様である。ここは巾1m高さ50cmの土壘跡が、10mほど残っていたからである。No.7図をみて下さい。

平坦地の西には、上底1m高さ90cmの土壘があり、20m辺には「犬走り」風の施設もみられた。北部の突出部にもみられた。

これらをNo.8図の断面図でみると、ABは、出入口から泉

台地との関連をみたので、鞍部で2m余低くなつて、長者屋敷の正門に登るのである。

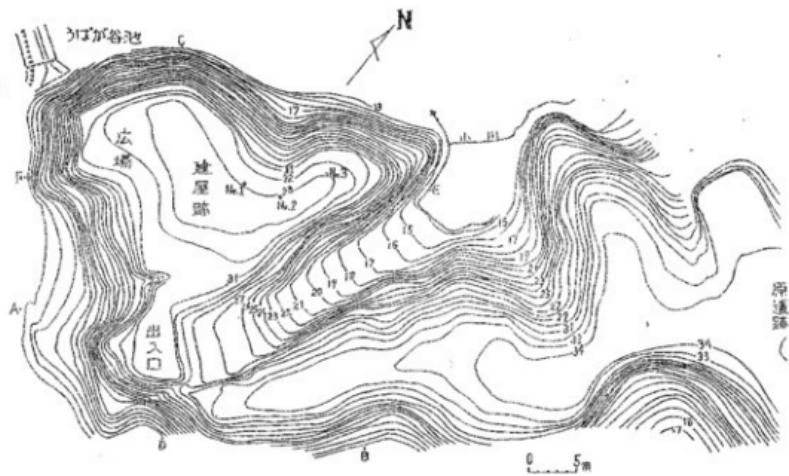
EFは北西部からみたもので、建屋区域は中央の高い所であり、広場は前庭の一一番広い所である。「犬走り」は二段に

なって、20m・25mに設けられて
いる。

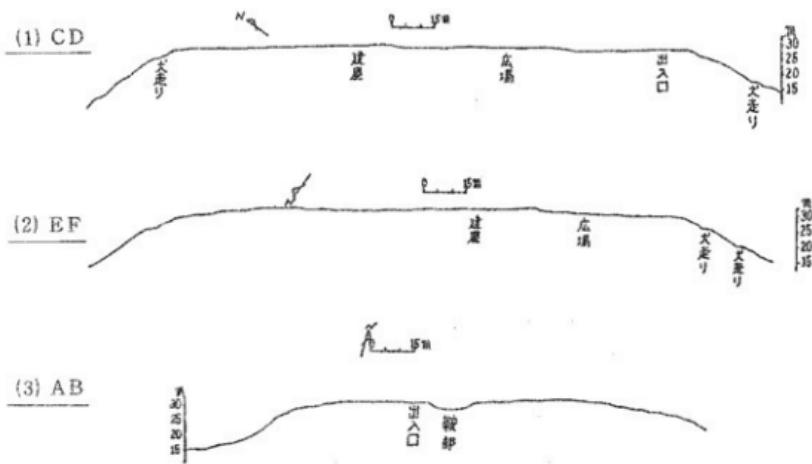
長者平は、建屋区域の調査がで
きなかったので、建屋遺構が不明
であるが、長者屋敷であり、館構
えである。

唐ヶ崎長者は、行方各地の中央
部に立地するのに対して、長者平
は、支台地の末端に設けられて、
後世の城・館の立地に似ている。

No.7図 長者平の地形図



No.8図 長者平の断面図



□ 長者平の遺構

長者平は大半を削土したので、次の二点を発掘してみた。

No.1 建屋区域の残部と、10cm位低い所の接点を中心
に、設定した。(No.7図参照)

No.2 No.7図の、等高線の33mがし字形に曲った所で、
北の突出部と広場及び建屋との関係・久保地と
の関連を見るために、発掘した。

No.3 北の突出部の利用状況を見るために、四方を
試掘した。

1. No.1号点。

篠、雜木の根が10cmから15cmあり、低い方は地山のロー
ム層になり、土師の小片が数個検出された。高い方の土は、
暗褐色であるから、3cm位づつ掘り下げた。

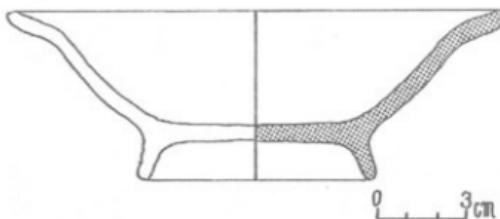
午後は降雨のために中止。

原遺跡の調査終了後に、南に1m拡張して、40cm下げる25
cmの地面を追った。

大壺片などの出土から、建屋裏に何か施設のあったこと
が考えられ、土床の深さが15cmから20cm位であるから、軒
は地を離れていたろうことが考えられた。

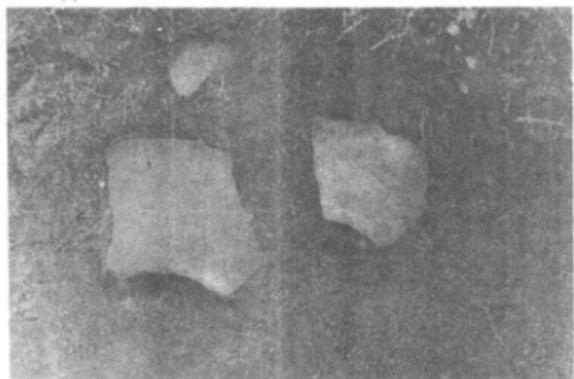
2. № 2 号点

№ 11 図の № 2 号点にみられる様に、土器片の分布は西側に多い。深さは 30 cm ～ 40 cm の所に多く、20 cm 以上では、土師片一点と須恵片の一点だけである。45 cm 以下は零である。住居跡とも判定しかねたが、土師片が 30 cm 以下に多いことは、地均しをして平坦地を造成した結果とも考えられる。



№ 9 図

胎 土	砂質精
整 形	外側にロクロ条痕あり
	坏部整形後に脚部を取付ける
	口径 16.5 cm 縦高 5.5 cm
燒 成	脚径 7.6 cm 脚高 1.6 cm
色	全体に火が通っている
使 用 痕	黄褐色
	内部に腐蝕痕あり



写 № 3 長者平 № 1 号遺構出土
底径 19 cm のカメの底部（土師器）
向こうの一ヶは坏の口縁部片である。

土師式の須恵器がある点からみると、長者平の名称通りに長者関係の建屋が早く、後に一部を改造して、防禦施設を持つた「山寨」にしたのである。その時にこの辺は、連絡路の中枢的地点でなかつたろうか。

3. No. 3 号点

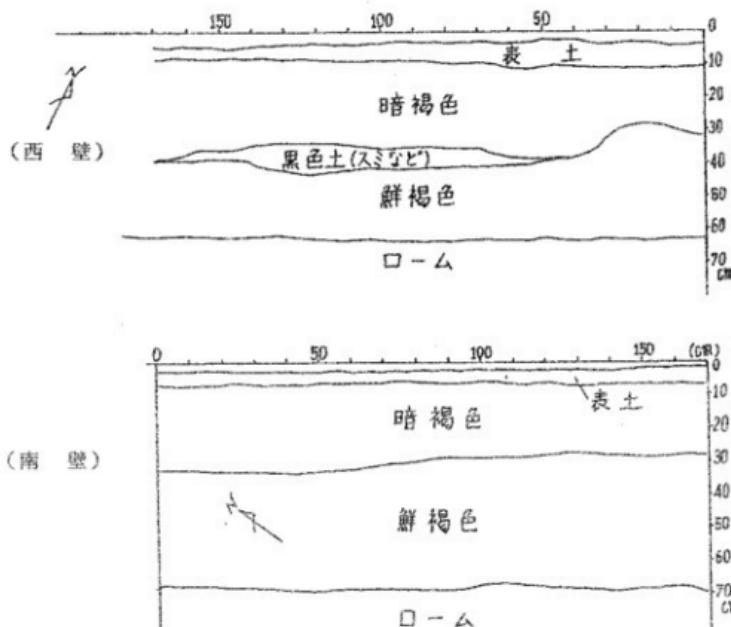
No. 12 図の No. 3 号点
の土器深度図で、土
器片は 20 cm までに、
土師器片三点、須恵
器片二点と、縄文土
器片一点だけである
から、建屋遺構は考
えられない。若しあ
ったとすれば、泉台
地より 2 m は低いから、
北方を見張る橹など
のあつたことは考え
られる。

No. 10 図の地層図で、

南壁の地層には何の
変化もみられない。

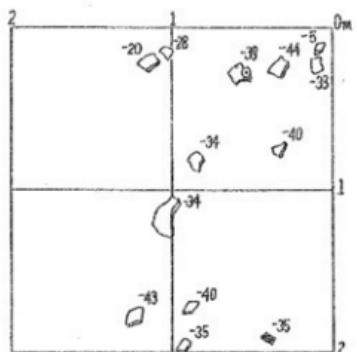
西壁の -30 cm の線が乱
れて、木炭を含む黒
色土があるが、上の
色土がどの燃焼は
なく、埋めもどされ
ている。

No. 10 図 長者平 No. 3 号地の地層図 57. 5. 15

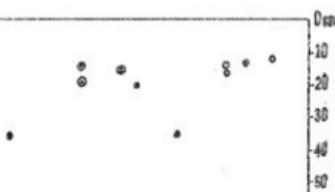
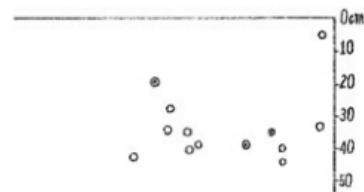
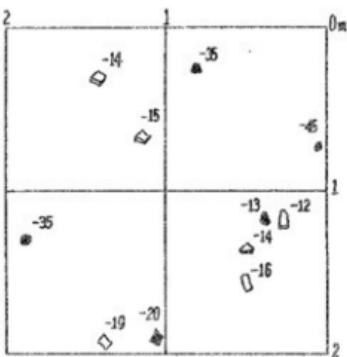


No. 11 図 A 地区 No. 2 号点の土器深度図

(◎) 挿文 (○) 土器 (◎) 残迹 (●) 石



No. 12 図 A 地区 No. 3 号点の土器深度図



三 原遺跡 (B 地区)

B 地区（原遺跡）は、駐車場造成のために、削土した土で東側の傾斜地を造り、其の後を盛土で埋めたので、残る 10m 余も表土はなくなって、粘質土の盛土に覆われていたのであるから、北側に寄せて巾 2m で長さ 40m のトレンチを設定し、せて住居跡二戸は、検出したいと思つて着手した。

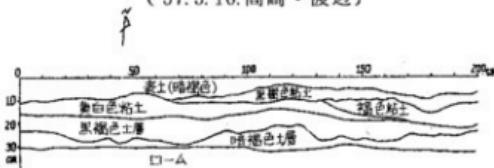
No. 13 図の原遺跡 No. 5 区の断面図みると、盛土の層がよくわかる。表土を口 1 ム層まで削土して、その上に盛土したのである。黄白色粘土層は、長者平でみると -2m 以下にあるものであるから、表土は他の埋立に使い、粘土層付近の土で盛土したのである。

No. 14 図は、No. 8、No. 9 の断面図である。-30cm から -35cm は、表土を削土した上に盛土したものであるから、-40cm 近いの深さの住居跡等は、上床の確認と柱穴を検出する程度に終るのである。だから No. 5 号区から No. 13 号区は、-30cm から -35cm で、削られたコーム層が出てしまつているのである。

No. 13 図

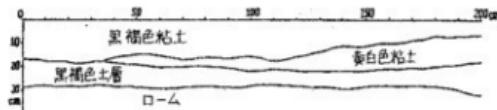
原遺跡 No. 5 北壁断面図

(57.5.16. 高崎・渡辺)



原遺跡 No. 5 号西壁断面図

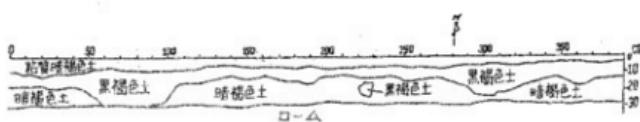
(57.5.16. 高崎・渡辺)



No. 14 図

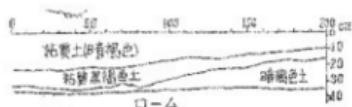
No. 8, No. 9 の北側断面図

(57.5.16. 高崎・渡辺)



No. 8 の西側断面図

(57.5.16. 高崎・渡辺)



1. №1号住居跡

№1号住居跡は、№3区に出入り口とおぼしき土層の変化が検出され、小柱穴の二ヶ所も適所にみられたので、住居跡を想定して、西と南に拡張したのである。

№16図の「土器片出土状況」は、№1号住居跡のものである。分布状況を、平面的にみると、西側の1m以内及び北西部は、皆無である。分布密度の多いのは、東部及び東南部であつて、床面に土器片はなかつたし、破損した一ヶ体の土器片も、検出されなかつたのであるから、諸道具を全部持つて移転した廃屋跡に、数年後から危険物捨場にしたのである。

土器片等を捨てた人々は、東側に居住していた人々であると考えられる。

原遺跡の№1号住居跡は、№17図の通りであるが、土の堅さと時間の都合で、綿密な調査ができなかつたので、概況を述べると次の通りである。

「四方の隅丸方形で、出入口を東側に持つており、「カマド」は北側に在つた。

東側に在る出入口は、一段目の高さは25cmで、二段目は地表である。屋根は径6cmの柱四本を、桁と連結して屋根組を作り、茅などで屋根をこしらえたのであろう。

室内に入ると床面は平坦で、四周の壁面との間に溝が設

№15図 深度別土器片の割合

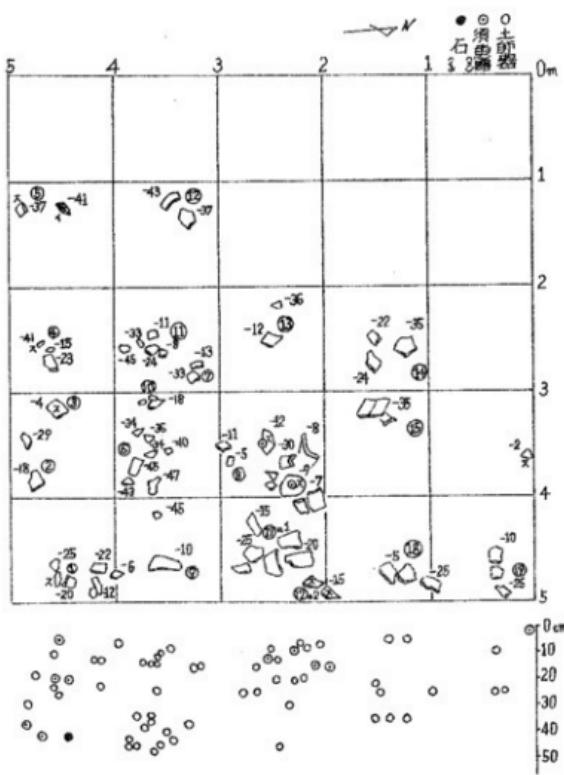
%	計	須恵器	土師器	
10.60	7	2	5	-10
31.82	21	3	18	-20
25.76	17	2	15	-30
16.67	11	1	10	-40
15.15	10	1	9	-50
				cm
	66	9	57	計
100.00		13.64	86.36	%

て、10cm以下は21片と最多である。10cm以上は急に減少して、7片となつてゐる。10cm以上といふのは、當時とすれば、平坦に近かつたのであろうと推察される。

10cm毎の%をみると、10cm迄が10%，20cm迄が31.82%と一番多く、次いで30cm迄が25.76%と多いので、10cmから30cmの頃が57.58%を占めているから、この頃に約60%占めているのである。

捨てられた土器片を類別すると、土師器片が57片、須恵器片が9片である。割合は、土師器86.36%に対しても、須恵器は13.64%である。土器片の多いことは、当時の生活用具としての土師器の占める割合が、大であったことを物語るものであると考へられる。須恵器の少ないと云ふことは、當時余り普及少なかつたのと、大切に扱つていた結果の表れであると推察されるのである。

No. 16 図 No. 1 住居跡の土器片出土状況
57.5



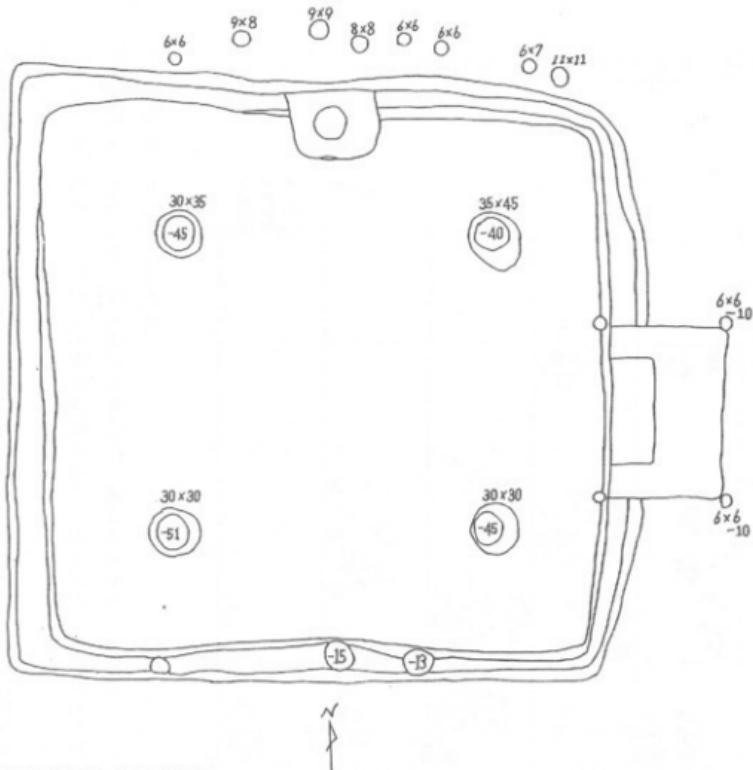
けられていた。柱は四本で、南側の二本は径 30 cm である。北側の柱は、30 × 35 • 35 × 45 の柱穴であるから、径 30 cm 余とみてよいであろうと思う。

室内では、南側に三ヶの穴が検出されたので、中央の穴を棟木の支柱とみるか、椽を受ける支柱か、調査不充分のために判断しかねるのである。

北側の屋外には、八ヶの穴を検出したが、他の所では細密な調査をする時間がなかったので、不明である。「カマド」のある所に、穴の列があり、「カマド」の後は壁面を離れ、「カマド」から遠ざかると、壁面からも遠のくのである。これは、屋根を「カマド」から、平面的に垂直的に遠ざけて、火災防止に留意したことであると考えられる。

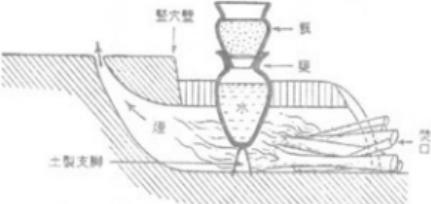
小柱の穴が傾斜しないで、垂直であるということは、軒が地上を離れていたことを意味しているので、50 cm か 70 cm 位軒が地を離れたと推察されるのである。

隣接地の畑を調査すれば、この問題は解決されるだろう。



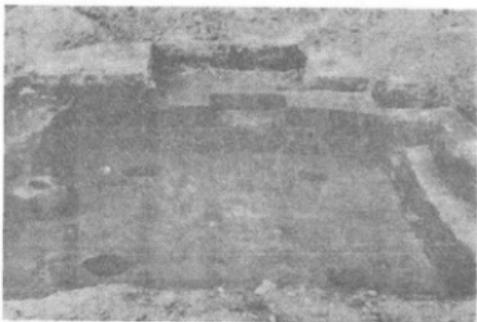
No. 17 図 B 地区 No. 1 号住居跡

(昭57.5.21. 国府田・石田・杉山)



日本生活文化史 2 「庶民生活と貴族生活」

(河出書房新社) より



Sp No. 2 No. 1 号住跡
(上方の階段上の所が、出入口)

2 電について

No. 18 図は、原遺跡 No. 1 号住居跡（B 地区 No. 1 号住居跡である）の「カマド」である。

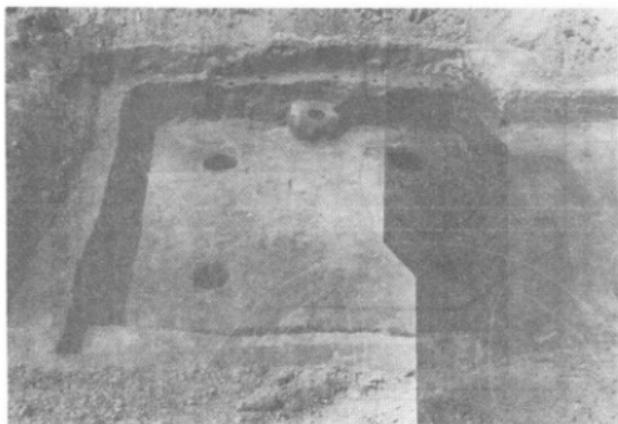
大きさは 50 cm 四方で、高さは約 20 cm であるから、小さい単独のカマドである。

火袋の広いのと、「土がま」をかける口の広いのは、柴を燃した時に、燃焼が良くなるためで、更に完全燃焼を助けるために、西側に通気孔を開けてある。

竈の火袋の中央に、「土がま」を受ける「土柱」があるはずだが、検出されなかつた。「土がま」をカマドにかけた時、「土がま」とカマドの間にすき間のあることは、煙と炎が出て燃焼がよくなり、「土がま」全体が加熱されるのである。

この竈は、最近まで我々が使っていた、土竈の粗形である。最近のは、大ガマ・中ガマ・小ガマと、三連式の竈が多くつたが、煙出しは無いのが普通であった。

焚木は、木の枝（松杉雜木）・落葉（松葉杉葉）など、居炉裡には、薪か木の株などであったが、この当時の焚木は、焚き口が小さいから、柴などであつたろう。



写No. 4

B 地区 No. 1 号住居跡を南よりみる。

隅丸方形で、カマドが北壁に、出入口は東側に設けられてある。北壁上の小穴は屋根を支える小柱のあつた所、カマドの所は屋根が 1 段と高くなっていたようである。カマド後の柱穴は 1 段後の土中にある。（No. 17 図参照）

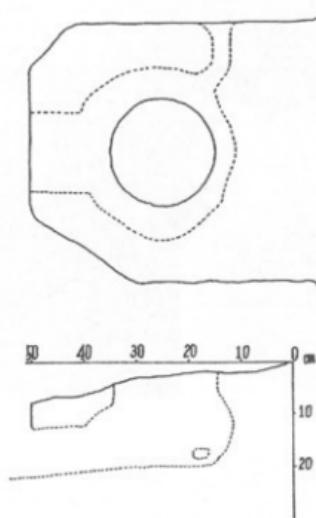
3 瓶について

カマドがあれば、食物を煮たり蒸すのに、「土がま」と

瓶が必要になって来るるのである。

縄文時代であると、大きなツボか深鉢に物を入れて、周囲で火を焚いて煮たのであるが、後には炉から竈に変つて来たのである。

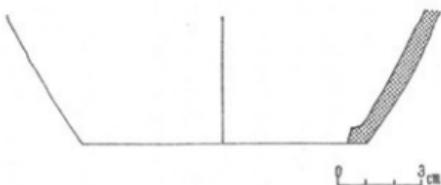
No.19図は、須恵器の瓶の底部であるが、この形式は、土



No. 18 図
B 点 No. 1 号住居跡のカマド
(昭 57.5.19. 海老原)

師器、須恵器にみられる粗形的のものである。底に大きな孔をあけ、側壁の底部に、底の一部を残しておき、簞などを敷いて食物を入れたのである。

No.22図は、土師器（諸井出土）であるが、持つのに便利な把手の付いているのが、特色であり進歩したものである。

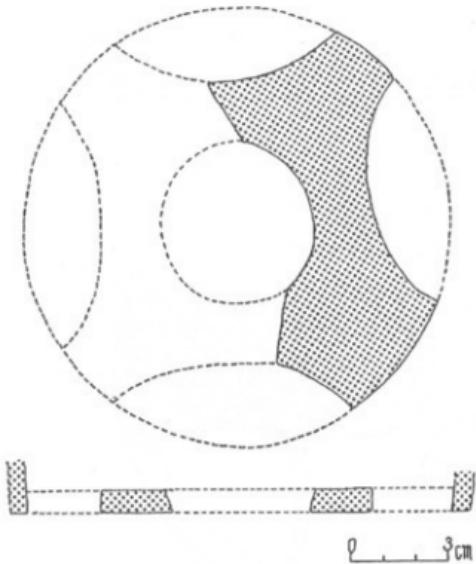


No. 19 図

胎土 精選銀雲母多量
整形 底辺の外側は窪けずり（右から左に）
底径 10.2 cm
色 灰青色
焼成 良好

これに類したもので、「土なべ」の場合には、把手の上側に紐を通す設備をするが、火炎の関係から、「土なべ」の内側に付けるようになるのである。

No.20図とNo.21図は、須恵器の瓶の底部で、瓶としては、底に竈を使用することに変りはないが、底部構造に一段と工夫の跡がみられるのである。



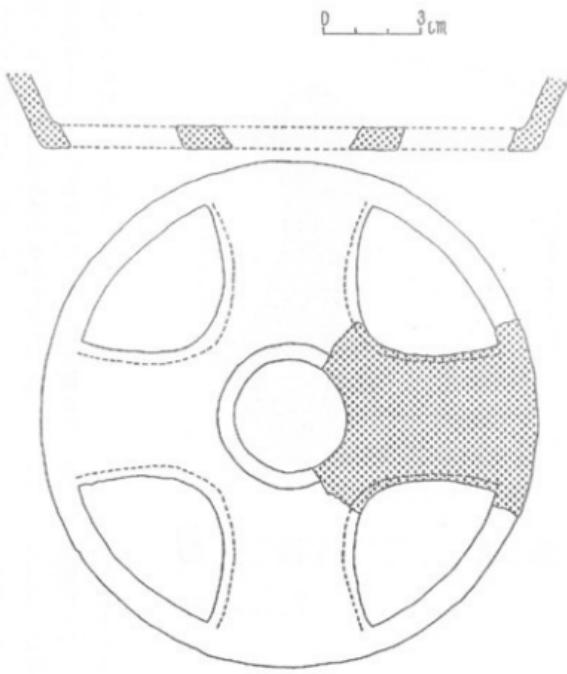
No.20図 須恵器の「こしき」の底部 (→)
(昭57.5.21.海老原)

胎土 整形	精選微細銀雲母含有 中央の孔は、底内より0.2cmせまい 周囲の孔は、直に近い 残片の測定により作図した
色 焼成	灰黒色

No.21図の瓶では、底面の一部が側壁に付いて、残されているから、竈の一端がかって、安定するのである。従って、No.21図の瓶は、機能的に改善されたものである。

瓶の底部は判明したが、瓶の全形が不明であり、これに伴う「かま」も不明であるから、これらは今後の調査研究にまつはかないのである。

No.20図とNo.21図は同一形式で、底に十字形の底部を残し、十字形の中央に孔を開ける、更に十字形と瓶側壁との間の三角地点に、底を切りぬいて孔を開けるのであるが、No.20図では、底面に直角に孔を開けりぬくが、No.21図では、瓶の側壁に平行して、底面に対しては斜に開けりぬくのである。両者をみると、No.20図の瓶は、側面に底面の残りがない、粗形的技法である。

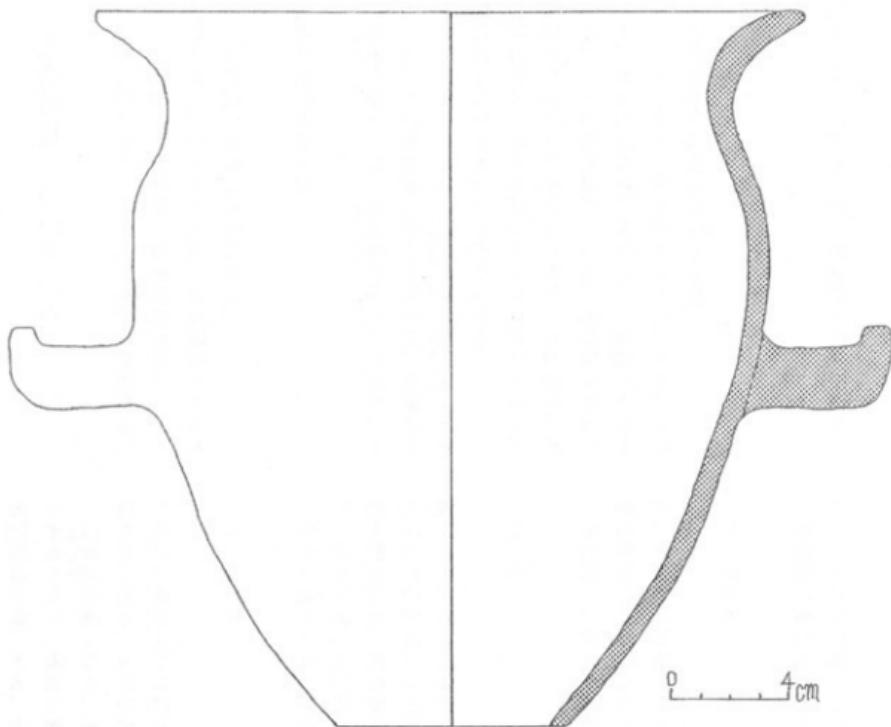


No. 21 図 須恵器の「こしき」の底の図 □

(昭 57.5.20. 海老原)

胎土	精選微細銀雲母少量含有
整形	内部平滑、外部底辺近くは削りする
	孔 中央の孔は、内部は外部より0.6cmひろい
	周囲の孔は、内部は外部より0.8cmせまい
色	灰青色
焼成	良好

(残片の測定によって作図する)



No. 22 図 把手の付いた「こしき」

胎土	精選
整形	外部 縦横に籠みがき底あり 内部 縦に籠みがき
	口径 23.6 cm 高さ 23.5 cm
	把手 巾 3.0 ~ 4.0 cm 厚さ 4.0 cm
	底径 外径 7.5 cm 内径 6.5 cm
焼成	良好
色	紅褐色
出土地	諸井

No. 1 号住居跡の人々
は、移動時に全財産を
持つて行っており、火
災の痕跡もみられない
し、「カマド」の使用
も短い様であるから、
なぜ移動したのか判断
に苦しむものである。

六、土器（生活用具）のいろいろ

泉集落及びその周辺に住んでいた人々が、日常用具として、使用していた土器は、土師器と須恵器である。

出土した土器片から、特色あるもの、復元図のできるものを挙げると、次に述べる様なものである。

1. 木の葉の圧痕のある土器

土器製作に轆轤を使うのは、弥生時代からであるが、土器製作に当って、木の葉の裏に粘土をおいて、作製する技法もあつたのである。これは、縄文土器の網代痕—弥生土器の布目痕に続くものであろうと考えられる。

2. 浅い坏

No. 23 図から No. 27 図は、木の葉痕のある「葉底」である。器種は、底径 7.0 cm から 8.5 cm の壺の様である。No. 23 図は、底の全体があるので、木の葉も識別される。No. 27 図は底の一
部分だけなので、底径の計測ができないし、胴部の立ち上がりも判明しない。木の葉も、葉脈が太いだけである。(これらについては野原幸之助氏の項 P.85 を参照)

3. 深い坏

No. 29 図は平底である。安定度は平坦であるから、平底が普及すると共に、両者に脚付しが多くなるのである。
口縁部が薄くなり、唇に当る口唇部は、より薄く丸みを持たせてある。丸底の中心部が厚いのは、安定を良くするために、重心をここにおくのである。

4. 壺

No. 30・No. 31・No. 32 図は、深さが浅い壺より 1 cm 以上深くなり、平底であって、安定をよくしている。深い壺が、飲み物を飲むとか、皿に使うなら、深い壺は、食物を盛るのによかつたのでないかと思う。口唇部の厚いのは、飲む器の機能から、盛る器に変った証拠であろう。

5. 脚付壺

No. 33 図は、深さが口径の二分の一にも達しており、口縁部が外反して薄くなっているから、飲み物や食物を盛るのに、利用された様である。

No. 28・29 図は、浅い壺であるが、No. 28 図は丸底であり、

No. 34 図と No. 35 図である。脚を付けて安定度を高めると共に、より美的に飾ったのである。No. 35 図でみると、底部か

ら緩に立ちあがっていって、口縁部で円を描いて、内側に伸び上って器形をしめている。

製作技法は、軋轍の上で坏部を作り、範で粘土塊から切り離し、後で脚付けの部分に二条余の沈線を引き、ここに脚部を取付けた様である。

6. 土がま

甕に「土がま」をかけて水を入れ、その上に甕をのせて、底に質を敷き食物を入れて、ふかしたのであるから、「土がま」と「こしき」は、組になっていたのであるが、土師のこしきは検出されなかつた。

No.36図からNo.40図までの土器は、煤が付着していたり、下部が焼けたゞれている点などから、「土がま」としたのである。

甕で、米や雜穀を蒸したり、直接この「土がま」で、魚貝を煮る、鳥獸の肉を煮る、山芋を煮たりしたのであろう。従つて「土がま」の破損率は、多かつたのではなかろうか。

7. 土師器に、須恵器の技法を取り入れた土器

No.41図の中広の平行押型文、No.43図・No.44図も類似の押型である。No.42図は、中広の押型を等間隔に削つた様である。

土師器の各器形に、須恵器様の押型文を付けているが、焼成は土師器のやき方であるから、須恵風の土師器である。新しい須恵器文化を採り入れても、胎土と窯などの問題が、未解決の頃の土器である。

8. 須恵器の蓋のツマミ

No.45図からNo.48図まであるが、形が美しくて使いやすい「ツマミ」はどれか。No.47図は、指が滑って摘みにくい。No.48図は、No.47図よりは良いが美的でない。No.45図は、持ちやすくて、形も美的である。

ツマミにも、工夫努力の跡がみられるのである。

9. 須恵器の模様

須恵器の模様というが、これは模様として付けたのでなくて、器形を整えた跡なのである。

No.49図は、粘土の継ぎ目を横になでて、それから、外側は同心円文で、内外を同時にたたいて、粘土の厚さを均一にしめたのである。

No.50図は、外側に同心円文を残して、内部は使用目的から平滑にしている。

10. 須恵器の甕の整形

No. 51図とNo. 52図は、厚さと「そり」からみて、甕である。

No. 51図の表面は、同心円文で無雜作に整形しており、No.

52図は、平行沈線文で無雜作に整形し、内部はNo. 51図よりは、平滑にしている。

No. 49・50は壺であるから、整形も外觀を美しくする様にしたが、No. 51・52は甕であるから、実用的に整形したのである。前者がはでなら、後者甕は浅い模様である。同一施文具を、器によってこの様に使いわかれているのである。

11. 須恵器の蓋の模様

No. 53図の蓋でみると、内部には渦状の輪紋痕が残つていて、表の方は平滑化されて、輪紋の痕は薄くなっている。

この様な技法は、甕の場合が同様であり、脚付皿の時は、坏面は丁寧に仕上げるが、脚内にかかる底部は、磨きをかける必要もないのである。

12. 須恵器の底辺部の整形

No. 54図の胸部は、押型でたたいて整形するが、底部近くになると、あまり目に付く所でもないから、鏡で削土整形して、甕全体の美的形態を整えるのである。

左から右下に削った痕跡があり、左から右横に削土した所もみられる。

13. 糸切底

輪盤の上で完成した器体を、粘土塊から切り離す時は、薄い箇で切り取ると、糸で切り取る方法とがある。

No. 51図は、糸で切った「糸切底」である。小物はこのままで使用されている。切る時に3位粘土を残して、台付風にすることもある。

14. 脚の付け方

No. 56図は、脚の取付けが不良のために、脚部が脱落したのである。拓本左下の1は、脚を付けるために、付けた沈線である。これは沈線が一条の様であるが、普通二条つけている。この沈線上に脚部粘土を付け、左右を粘土糊で密着させるのである。

15. 骨壺と蓋

No. 54図で、蓋は実測図であり、須恵器であるが、壺は昭和25年の開拓當時のことであるから、成島謙二氏の話のまま記録したのである。多少の誤差があつても、火葬場として貴

重な資料である。(海老原 幸)

16. 出土土器に関しての覚え書

高埜栄治

(1) はじめに

天地は 広しといへど 吾が為は 狹くやなりぬる
日月は 明しといへど 吾が為は 照りや給はぬ 人皆
か吾のみや然る わくらばに 人はあるを 人並に
吾も作れるを 紡もなき 布肩衣の 海松のごと わわ
けさがれる 檻樓のみ 肩にうち懸け 伏廬の 曲廬の
内に 直土に 薦解き敷きて 父母は 枕の方に 妻子
どもは 足の方に 開み居て 夔へ吟ひ 電には 火氣
ふき立てず 颤には 蜘蛛の巣懸きて 飯炊ぐ ことも
忘れて 鶴鳥の 呴ひ居るに いとのきて 短き物を
端截ると 云えるが如く 楚取る 里長が声は 寝屋戸世
まで 来立ち呼ばひぬ かくばかり 術無きものか
間の道 一貧窮問答歌部分一(角川 鑑賞日本古典文学)



Sq No 3 平出遺跡の復元住居
—長野県塩尻市—

私たちは、このように「万葉集」や「常陸國風土記」をはじめとする文献から、過去の人類の生活・文化を垣間見ることができ。また、今度の調査・研究のように、考古学あるいは植物学等の協力の下に、人類の歴史を再構成することも可能である。土に埋もれた文化遺産や植物、生態系は多くを語らず、私たち人類の歩んできた長い道程を実証し、眞実を見極めさせてくれるのである。

みなさんが烟仕事中に拾い上げる一片の土器、あるいは近くにひつそり佇む林の中の塚等は、埋蔵文化財であり、遺物・遺構と呼ばれている。これらは、人類の遺産として貴重であり、私たちみんなの財産であることを再認識しなければならない。

(2) 疏称遺跡出土土器紹介

疏称遺跡は、表採等による遺跡分布調査から、土師器・須恵器の散布が広範囲で確認されていて、発掘調査により、土師器・須恵器を使用した生活の場所であることが立証された。

出土土器は、土師器・須恵器が大部分を占め、他には、縄文式土器片を数個検出したのみで、弥生式土器の存在は認められなかつた。また、漁獵具と考えられる土鍬が六個体発見された。土師器では、环形土器、塊形土器、變形土器の形態があり、須恵器でも环形土器・塊形土器があり、腹

底部と考えられる土器片も検出された。出土した土器の多くが、小片のため、規格等に一貫性があるか否か断言できないが、調査区A・Bに各々若干の特徴があり、幾つかの差異を掲げることができる。但し、完全な元の形のまま検出されたものがほとんどなく、小破片が大部分で復元出来るものも少いことから、器形や法量を正確に揃めない。また、堅穴状遺構あるいは、住居址と土器が同時代のものと断定する資料に欠けるため、土器から堅穴状遺構や住居址の時期を比定することは難しい。

長者平（A地区）

長者平では、三地点の試掘 sondage を調査した。その中で最南部に位置する第一区地点に於て住居址と考えられる堅穴状遺構が確認された。

土器は、遺構の床面に近く偏在的状態で出土した。土師器には、环形土器・塊形土器が検出された。环形土器は、高台壇の完形一個体はあるが、その他のものは実測復元できることは少い。特徴は、ロクロ水挽きの整形痕があり、胎土には砂質ながら緻密なものを利用し、内面が丹念にへらみがきされているものが多い。そして、内面黒色の土器とそうでないものに大別できる。塊形土器は、口縁部から頸部にかけての小片がほとんどで、胴部や底部を伴うものがいたため、全体の形態構造を把握できないが、全体的に薄手で焼成は良く、口縁部から頸部にかけて特徴を持つ。

分類すると、口縁部に沈線状のV字溝を有するものと、U

字状の二段口縁を成すもの、あるいは前記の特徴に加えて

頸部に明瞭な凹部をつくり、段状にして胴部と区分するも

のがある。これらの溝は、横ナデ整形の際あるいはその前

行程で工具等により削りとった所産と思われる。須恵器で

は、环形土器・蓋形土器の破片や甌の底部小片が検出され

ている。平底壺状を呈する环形土器は、長者平に散布が多

くみられ、青灰色で体部内外に数条の波状起伏を有してい

る。また、甌胴部から底部にかけての土器片には、胎土が

小石を含み粗く赤褐色を呈すものがある。この表面部分は須恵器質であるため、須恵器製作技術の未熟（焼成不良等）によるものか、意図的行為による製作かは、窯跡の発見や実験による立証を待ちたい。

原遺跡（B地区）

トレンチ発掘を企画したが、都合により部分的な発掘に止めた。この地区は、上層三〇センチメートル位は客土によるもので、発掘区が整地のため部分的に攪乱を受けていた。

採取では、多くの土師器・須恵器が確認されており、発掘による遺構、遺物の検出が期待された。発見された第一号住居址では、床面上層で土器が不規則に散布しており、土器製作の時期差も認められることから、流れ込みによる

埋没と思われる。土師器の形態は、环形土器とみられるもの、そして甌形土器がある。环形土器は、口縁部に強い横ナデによる凹状の帯を有し、体部との境に稜を持つ。また、丸底を呈し体部・底部をヘラ削りで整形している。壺形土

器は、环形土器と同様に口縁部に稜を有し、丸底で体部・底部をヘラ削りにより整えている。際だった特徴は、内外

面ともに黒色を呈することが掲げられる。長者平に於る黒色土器とは違い、光沢はあるがヘラ磨き処理は施されていないと思われる。ただし、ヘラ削り面を黒色変化前にナデ等により整えたとみられ、削り痕が磨滅している。この黒

色も意図的製作技法による付色と思われる。甌形土器は、実測復元できない小片が大部分を占め、詳細な特徴や法量を摑めない。口縁部は、長者平（A地区）のものより厚手で明瞭な稜を持たず、頸部からゆるやかに口唇部に外反するものが顯著である。胴部・底部等が検出されていないため、詳しい形態等も不明である。須恵器では、甌形土器・蓋形土器等の小片が出土した。

（注）①……P表(2) A₂を示す
②……同右 A₁を示す
③……同右 B₂を示す
④……同右 C₂を示す

出土土器一覧表(1) 単位:cm

種類	出土地点	図版番号	法量	特徴
坏	B地区 表採	A-1	口径約11.4 器高約4.0	焼成良好、赤褐色。胎土質にバラツキ 体部ヘラ削り H
坏	B地区 1号住	2	口径約15.0 —	焼成良好、黒色。胎土微石含む 体部ヘラ削り後ナデか 黒色処理(内外) H
坏	B地区 1号住	3	口径約17.4 —	焼成良好、暗褐色。胎土微石含む 体部ヘラ削り H
坏	A地区 堅穴	4	口径約12.6 —	焼成良好、赤褐色。 内面ヘラ磨き 黒色処理(内) H
坏	A地区 堅穴	5	口径約13.2 —	焼成良好、赤褐色。胎土緻密 内面ヘラ磨き 黒色処理(内) H
坏	A地区 堅穴	6	口径約14.2 器高約4.1	焼成良好、赤褐色。 内面ヘラ磨き 黒色処理(内) H
高台坏	A地区 表採	7	口径約15.0 器高約5.5	焼成良好、青灰色。 S
坏	A地区 表採	8	口径約14.0 器高約3.9	焼成良好、青灰色。胎土白ウンモ含む 底部ヘラ切り、手調整 S

(注) Hは土師器、Sは須恵器を表わす。

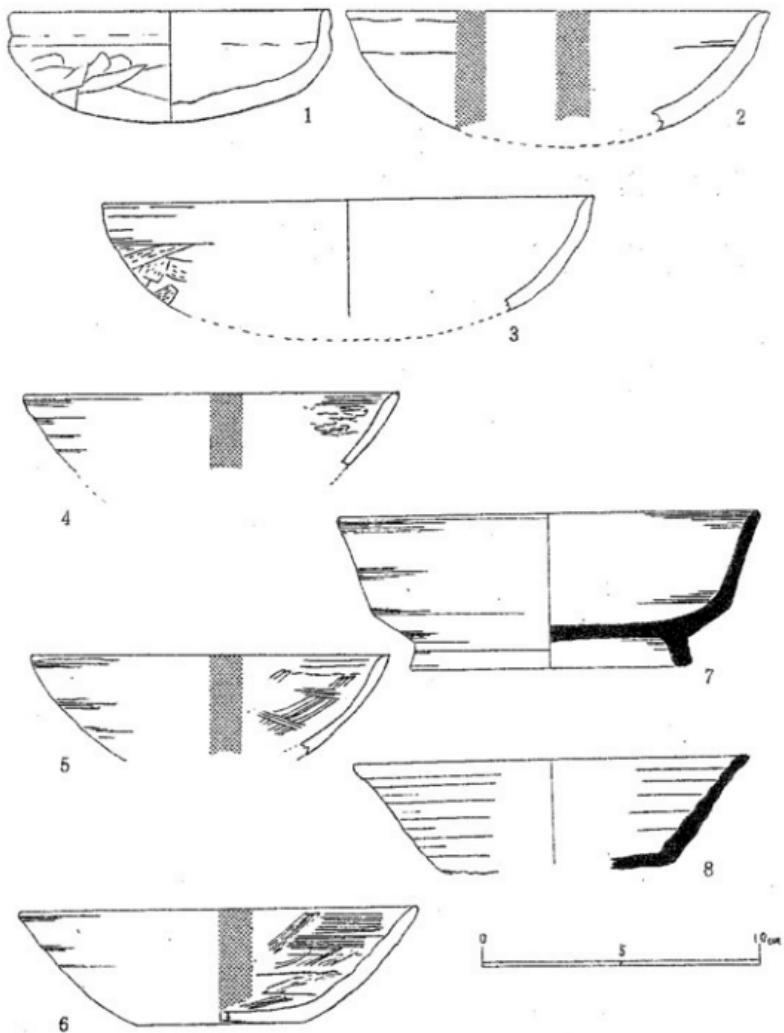
出土土器一覧表(2) 単位:cm

種類	出土地点	図版番号	法量	特徴
甕	A地区 堅穴	B-1	口径約25.6 現高約2.9	焼成良好、明褐色。頸部にカーボン付着 A ₂
甕	A地区 堅穴	2	口径約17.6 現高約8.1	焼成良好、灰褐色。胎土長石、白ウンモ含む A ₂
甕	A地区 堅穴	3	口径約18.0 現高約8.0	焼成良好、赤褐色。胎土微石多い A ₁
甕	A地区 堅穴	4	口径約21.2 現高約2.5	焼成良好、赤褐色。胎土微砂含む A ₁
甕	A地区 堅穴	5	口径約19.0 現高約7.0	焼成良好、赤褐色。胎土微石含む B ₂
甕	B地区 1号住	C-1	—	焼成良好、赤褐色。胎土微石含む C ₃
甕	B地区 1号住	2	—	焼成良好、赤褐色。小砂含み粗い C ₂
甕	B地区 1号住	3	—	焼成良好、褐色。小石多く粗い C ₂
甕	B地区 1号住	4	—	焼成良好、赤褐色。胎土微砂含む C ₂
甕	A地区 堅穴	5	—	焼成良好、褐色。長石、白ウンモ含む A ₂
甕	A地区 堅穴	6	—	焼成良好、外面カーボン付着、赤褐色 A ₂
甕	A地区 堅穴	7	—	焼成良好、外面カーボン付着、赤褐色 A ₂
甕	A地区 堅穴	8	—	焼成良好、明褐色。胎土微砂多い A ₁
甕	A地区 堅穴	9	—	焼成良好、赤褐色。白ウンモ含み砂質 B ₂

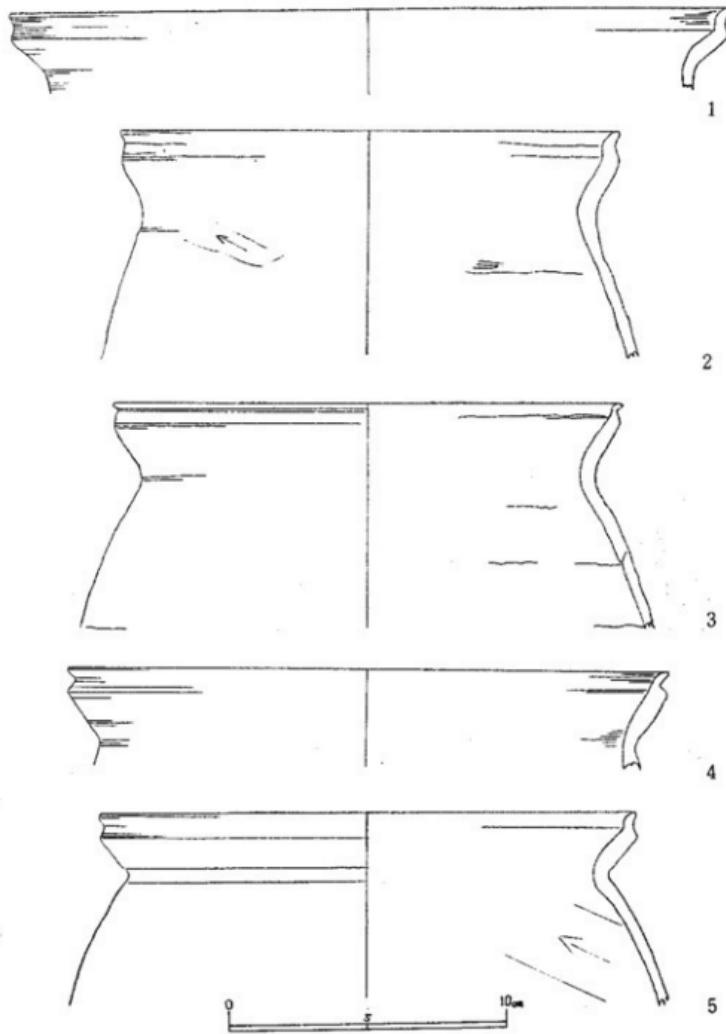
(注) 特徴欄 A₁～C₃は口縁部形態分類 P.39 参照

図版スクリーントーンは黒色処理を示す。

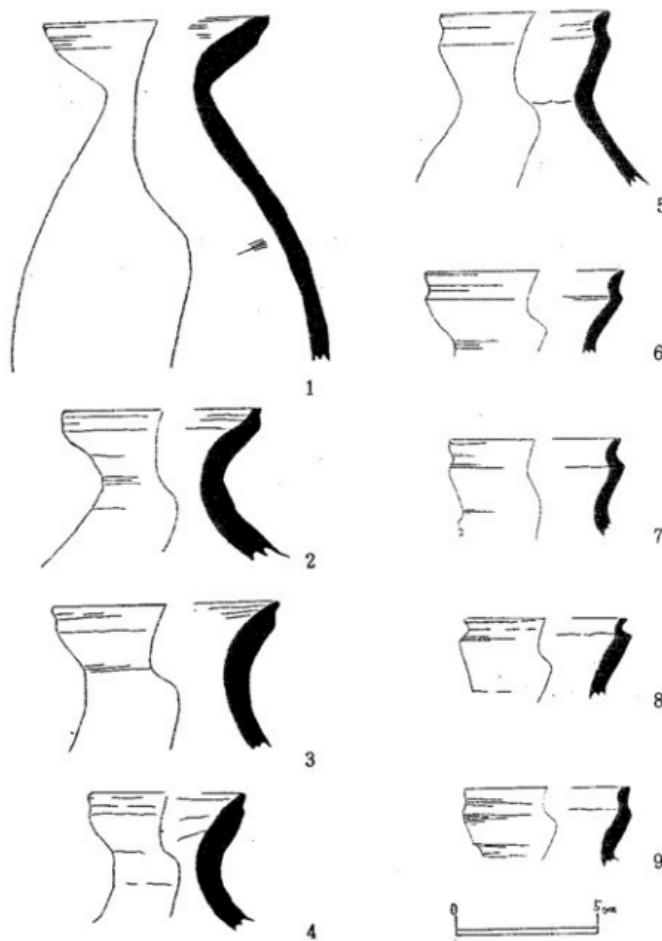
図版 A



図版 B



図版 C

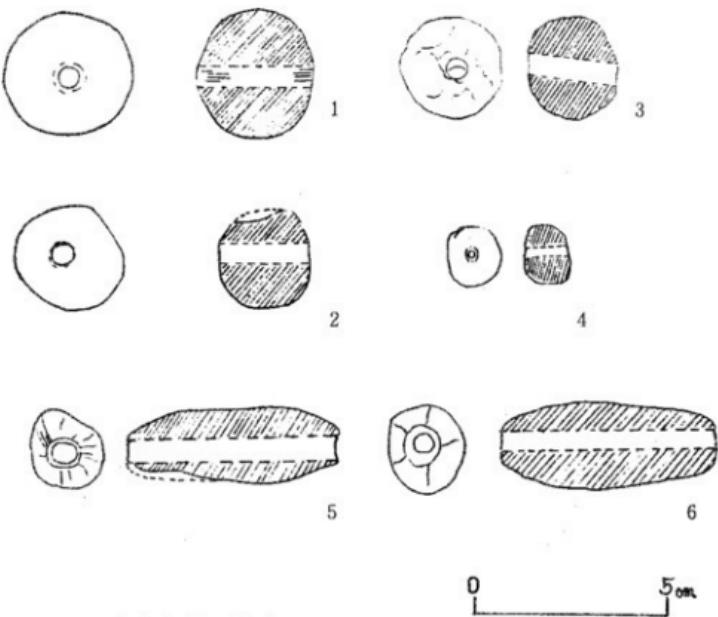


図版 D その他の土製品（土錘）

(3)

土錘
（どづち）

土器以外の土製品として、土錘六個が出土した。遺構に伴うものが一個で、製作・使用時期は決定できない。しかし、層位や出土状態から見て、土器類とはほぼ共存したもの



出土土錘一覧表

番号	形態	法量(cm)	孔(cm)	重量(g)	そ の 他
1	玉	3.3×3.0	0.6	27.0	焼成良好。胎土ウンモ類含む 灰褐色 H
2	玉	3.0×2.0	0.5	16.0	焼成良好。胎土微砂含む 赤褐色 H
3	玉	2.6×2.3	0.5	14.0	焼成良好。胎土微砂含む 赤褐色 指痕有り H
4	玉	1.5×1.1	0.2	2.5	焼成良好。赤褐色 孔中心小さい H
5	管	(径) 1.9×5.4	0.6	13.0	焼成良好。胎土緻密 黒褐色 孔は隋円 S
6	管	(径) 2.2×5.5	0.5	19.0	焼成良好。胎土黒ウンモ含む 明褐色 指痕有り H

(注) Hは土師質, Sは須恵質

と考えてよからう。形態と数量比は、大玉三個・小玉一個・管状土錘二個の三種に区別できる。用途は、漁具としての性格を持ち、大玉・管状土錘は漁網用、小玉は釣糸用として使われたと思われる。

末尾ながら

前述したように、遺構の検出や遺物の出土状態からでは時期比定はできないが、実測復元した土器から多少推定すれば、原遺跡の形成時期が古墳時代後期まで溯ると考えられる。当然、それ以前にもこの地が人類によって生活の場として利用されたとは思われるが、古墳時代終末期に至って集落増がみられ、今日に至るまで生活の場として活かされている。土器編年でいう鬼高式に位置する环類の検出をみると、遺跡周辺に分布する群集墳が古墳時代終末期の生活を裏付けていると考えられる。その後この地は、真式そして国分式（平底の黒色處理土器等）に編年の位置する土器を利用する人々によって繁栄を見たのである。

（高埜栄治）

1. 長者屋敷
「手賀郷土史」に
長者屋敷趾、手賀村字唐ヶ崎にあり、長者井・鐘掛松・茶屋・桜井等其屋敷跡内に存す。但鐘掛松は近年之を伐採せり。

永承の昔、行方郡唐ヶ崎村（今の手賀村内）に、山口四郎兵衛という長者あり。世に之を唐ヶ崎長者又は曾称の長者といふ。とある。

唐ヶ崎長者屋敷は、北浦村行戸の「唐ヶ崎」と玉造町手賀の「唐ヶ崎」に、またがつてある小字名であるが、郷土誌にある様に「唐ヶ崎村」が存在したのかも知れない。その当時「小座山」がどうであつたか、小座山は集落があり、布目瓦も出土しているから、寺院か豪族屋敷があつたのであろうと考えられる。

唐ヶ崎長者は、小座山周辺から行戸の一部に、勢力のあつた豪族であつたのである。

長者屋敷をみると、
主体部は、「行戸」の1044. 1054. 1053. 1056. 1055. 1054. 1053. 1056.南北が約120mと160mとからなつてゐる様である。資料1は1053年の野村八郎氏の記憶をもとに、現地で作製したものであ

1053 の部分は、-5m位の谷津に接しているから、生活用
1045. 水を得るのに便利であるから、炊事関係の建物があり、
1044. には中核的建屋があつたのである。

1043. 1253. 483 の部分は、二の丸的な存在で、南の防禦に当り、
1040. 鐘掛松・茶屋・桜井は、ここにあつたのでなかろうか。

1040. の井戸は、「長者井戸」と伝承されて、丸い素掘り井戸で、深さは2m余りあり、年中かれることがないので、付近の開拓者は漏水期になると、皆が利用したのである。防備の点では、西・北・東は谷津であるから、南の防備をすれば要害の地である。

鹿島街道の全盛時代はよかつたが、水田耕作が両湖岸に移るにつれて、集落が移動し、陸路も湖岸に転じると、無人の境となり、山林原野と化したのである。近世から再開拓が進むにつれて、両び開墾されて、今は畑作地帯となり、鹿島街道も開拓道路と改称されているのである。

布目瓦で、布糸の本数をみると、 $8 \times 8 \cdot 10 \times 8$ という数値が、1cm四方内で測定された。八郷町の瓦は、 12×10 本であり、鉢田町塔ヶ崎のは、 11×8 である。鹿島町片岡台のは、 6×6 と測定した。

布目瓦の破片を測定したのであるから、不正確であるが、八郷の瓦は窯跡からであり、鹿島町のは、町内の高尾崎（窯跡とみる）の窯によると考えられる。唐ヶ崎の瓦は何処産であるか、糸数は前四点の中間をゆくものである。

2. 布目瓦

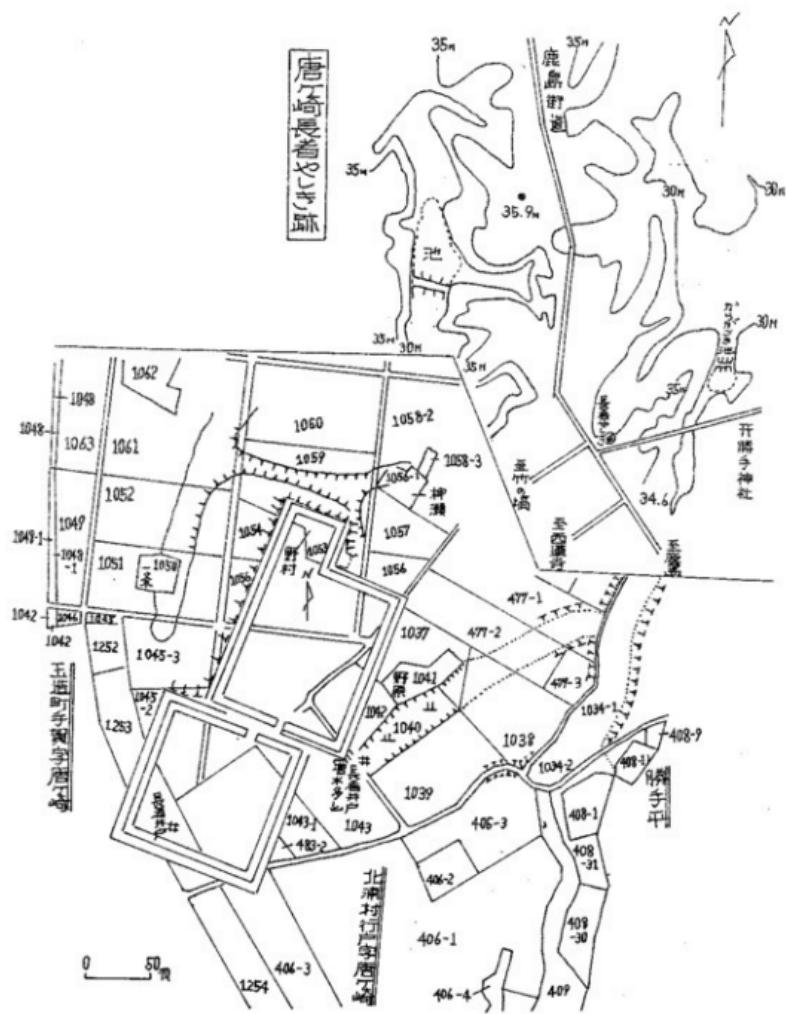
布目瓦の出土とあれば、大寺院か官衙を思い出すが、玉造町では、唐ヶ崎長者屋敷・井上長者屋敷・小座山遺跡などが、挙げられるのである。

No. 58図からNo. 60図の三枚は、平瓦である。緑ヶ丘の神子田三男氏が、開拓時代に採集したもので、今は貴重な三点である。

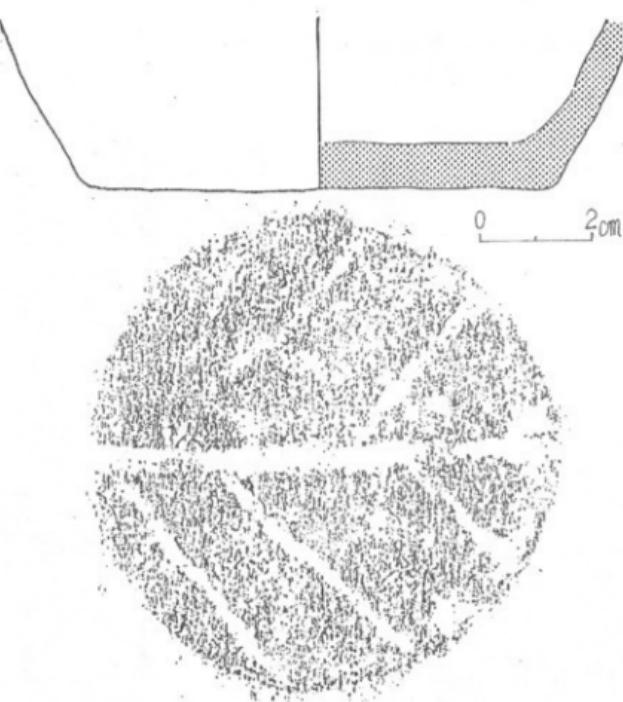
No. 61図は、砂質土であつて、瓦として役立つたかどうかと思う様な、無文の瓦である。

（海老原幸）

資料 1 唐ヶ崎長者屋敷略図
57.8.8 海老原



No. 23 図



胎土 精選微細白砂少量。微細銀雲母多量に含有
整形 内部一なげた糸痕多し
外部一底部近くは右から左に削土整形する
葉底
色 赤褐色
焼成 良好

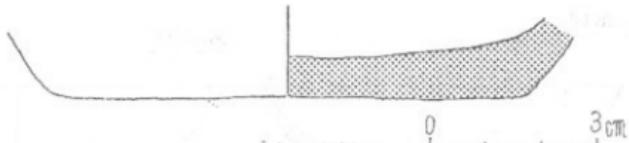
No. 24 図



0 2 cm

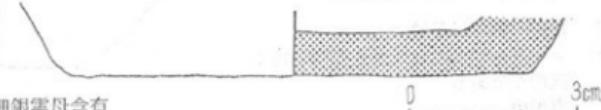
胎土 白色細砂微細銀雲母含有
整形 葉底 底径 7.2 cm
内部に輪積痕あり
外部は右から左に削土する
色 淡褐色
焼成 良好
出土 A No. 1 住

No. 25 図

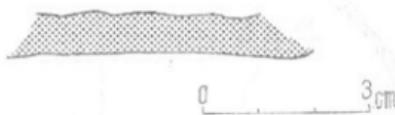


胎土 精選 微細銀雲母含有
整形 葉底 底径 8.4 cm
内部は平滑、外部に削り痕あり
色 褐色
焼成 良好

No. 26 図



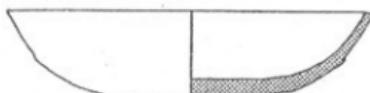
胎土 精選 微細銀雲母含有
整形 葉底 底径 8.4 cm
籠なでしている
色 紅褐色
焼成 良好
出土 A No. 1 住



No. 27 図

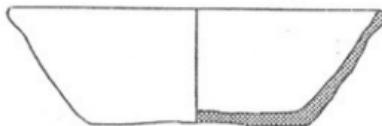
胎土 白色細砂、微細銀雲母含有
整形 葉底 底径測れない
内部は指でなでる
色 褐色
焼成 良好

No. 28 図



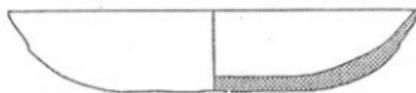
胎土 精選 微細白砂少量
整形 内部は平滑に磨かれている
口縁部の厚さ2mm、巾15mmで内外ともに磨かれている
底は丸底で、削土整形したままである

No. 30 図



胎土 精選 銀雲母多量
整形 ロクロ系痕が内外にあり底は平底で
鎌切りである
色 黒褐色
焼成 良好
使用痕 内部に班点あり

No. 29 図



胎土 精選 微細白砂と微細銀雲母少量
整形 内部は平滑で、口縁部に横に立あがり痕がある
外部、船底形底部に引抜き削り糸痕あり
口縁部は1.5cmを横になでて平滑化一
立あがる 口径14.6cm、高さ2.8cm
色 赤褐色
焼成 良好
使用痕 内部に班点あり

No. 31 図



胎土 精選 微細銀雲母多量に含有
整形 内外にロクロ痕あり
底は平底で、中央が1mmほど上っている
内部は鎌みがきをし黒く塗装する
外部は素焼のまま
胎土は赤褐色
良好

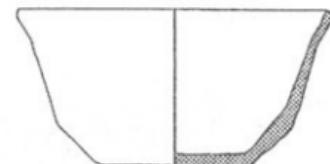
No. 32 図



胎土 細白色石 銀雲母含有
整形 内外にロクロ痕あり
口径 10.6cm、口唇部1mmふくらむ
底径 9.4cm、高さ 4.3cm
色 白褐色
焼成 良好
出土 No. 1 住-7

縮尺 0 5 cm

No. 33 図



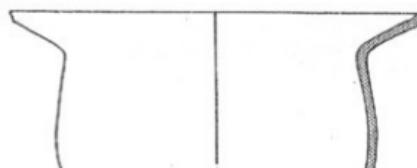
胎土 精選 銀雲母多量に含有
整形 ロクロ痕が内部にあり
底は鎌切りである
色 青白色
焼成 良
使用痕 腐蝕痕多し

No. 34 図



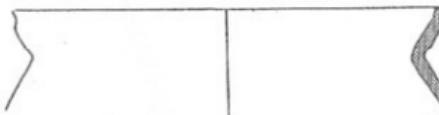
胎土 白色細砂多量
整形 ロクロ痕が内外と底部にあり
色 青色
焼成 良好
使用痕 残らず

No. 36 図



胎土 白色細砂多量 微細金銀雲母含有
整形 口縁部大きく外反する
色 黏土糊を塗布して仕上げる
焼成 赤褐色
使用痕 良
外部は焼けたぐれでいる。内部に
班点ありーカマに使用

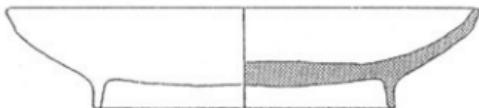
No. 38 図



胎土 白色細砂 微細銀雲母含有
整形 口縁部が「く」の字になって外反する
色 口唇部は 4 mm の厚で立ちかけん
焼成 褐色
良好
使用痕 外部に煤が付着している。焼ただれ
がある

縮尺 0 5cm

No. 35 図



胎土 白色細砂多し
整形 内部ロクロ痕を消す外部にロクロ
色 痕あり
焼成 底は切り左から右に廻る
青色
良好

No. 37 図



胎土 微細金銀雲母 白色砂を含有
整形 輪積みの痕がみられる。口縁部は外
反する。
色 黏土糊を塗布している
焼成 赤褐色
良好
使用痕 外部は焼けているーカマに使用か

No. 39 図



胎土 白色細砂多量 微細銀雲母少量
整形 口縁部「く」の字に外反し、口唇部が
外反しながら少し立つ
色 整形後に粘土糊を塗布している
焼成 赤褐色
良好
使用痕 内部に班点あり

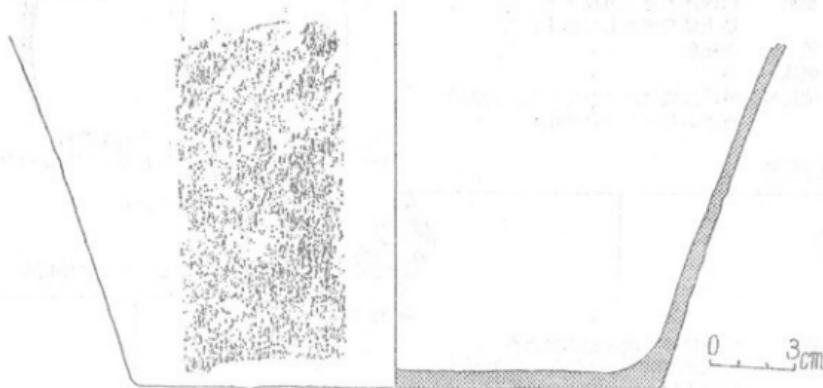
No. 40 図



胎土
整形

精選するも微細白砂と銀雲母がみられる
口縁部外反する。内部は輪積痕二条がみられる
粘土糊を塗布して横にならる

No. 41 図



胎土

白色細砂銀雲母多量に含有

整形

平行押形文で裏面を整形し、底辺近く 6 cm は範削りで整形する
内側は腐蝕でひどい

色

灰褐色

焼成

良

使用痕

内部は腐蝕で落ちている。表にも落はくがある

No. 42 図



胎土
整形
色
焼成

白色細砂 微細銀雲母少量
押型文で整形（表面）
内面は平滑
内外ともに黒色
良

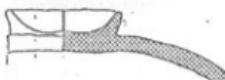
No. 44 図



胎土
整形
色
出土

精選 白色細砂少量 微細銀雲母含有
表一八条の押型文でかためる
長さ 3.5 cm
裏一平滑である
表一灰白色 胎土一赤褐色
裏一白褐色
長者平B点

No. 46 図



胎土
整形
色
焼成
使用痕

精選 微細銀雲母多量に含有
内部に渦巻のロクロ痕あり
外部に削り条痕あり
カマドより出土するか、焼けて
灰褐色である
良好
腐蝕斑点あり

No. 48 図



胎土
整形
色
焼成

精選 微細銀雲母含有
内部にロクロ痕の渦巻あり
外部に削り痕（右から左に廻す）あり
灰白色
良好

No. 43 図



胎土
整形
色
焼成
使用痕

精選 微細銀雲母多量
表一頭部から縦に平行押型文を
裏一なでたゞけ
黒褐色
良好であるが、低温である。
腐蝕あり、表にシミの斑点あり

No. 45 図



胎土
整形
色

精選
粘土柱に渦巻糸痕を作り、適当の
長さに切り、坏につけて「つまみ」
とする（指紋あり）
褐色

No. 47 図

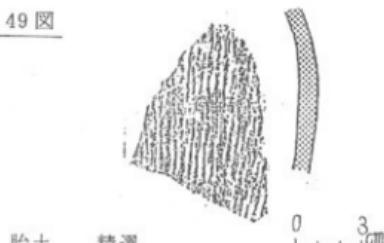


胎土
整形
色
焼成

精選細白色砂含有
ロクロ痕が内外に（右から左に）ある
灰青色
良好

縮 尺 0 5cm

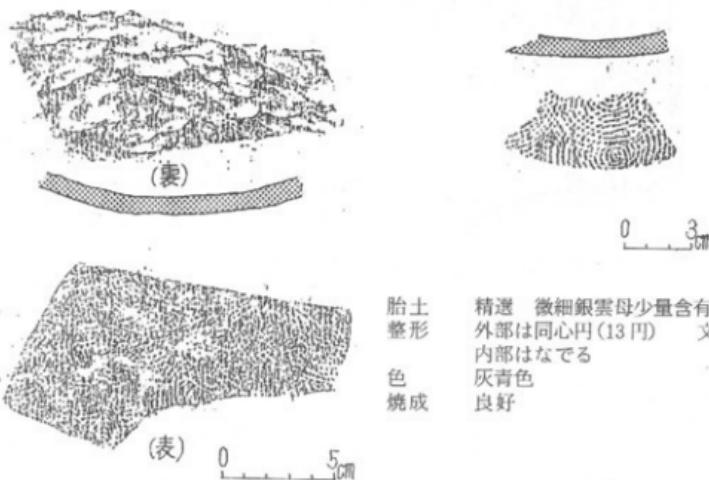
No. 49 図



胎土
整形
色
精選
表 縦の押型文に対して
横に10条の線を引く—全面的か
縦の押型文 $\frac{30}{10}$ mmの長さ
内側に同心円文がかすかに見られる
表—黒青色 内側—青色

No. 50 図

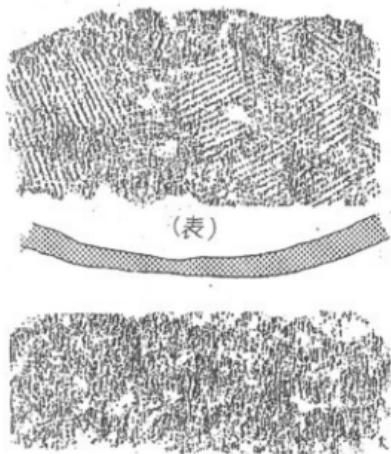
No. 51 図



胎土
整形
色
精選 微細銀雲母少量含有
外部は同心円(13 円) 文で整形
内部はなでる
灰青色
良好

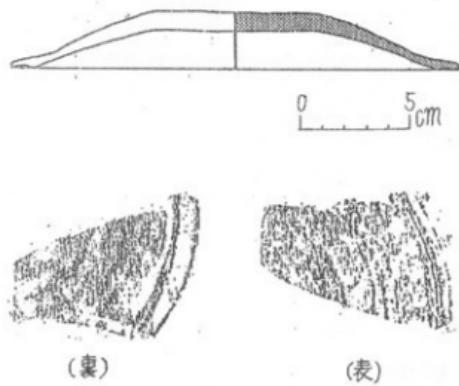
胎土
整形
色
精選 微細銀雲母少量
表—同心円 文
裏—無雜作になでる
灰青色
良好

No. 52 図



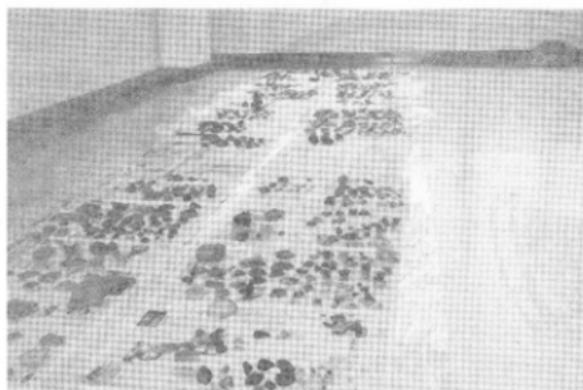
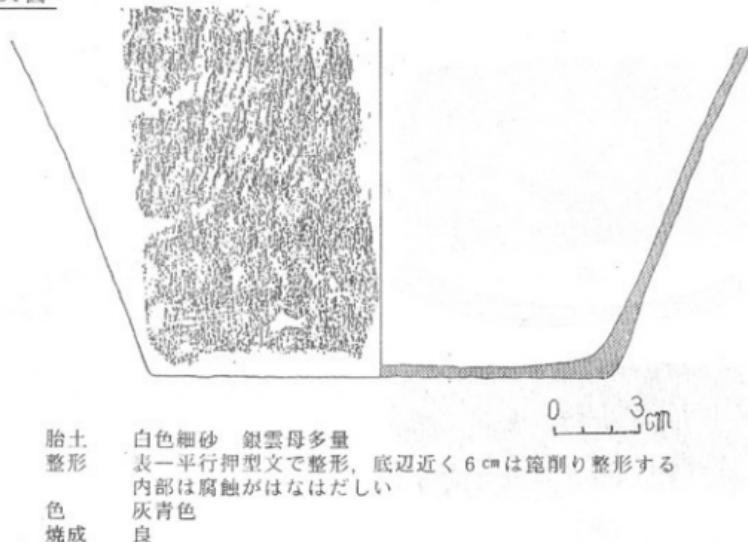
胎土 精選 微細銀雲母多量
整形 表 - 平行線文にて (長さ 5 cm 本数 9)
裏 - なでる
色 灰青色
径 24 cm

No. 53 図



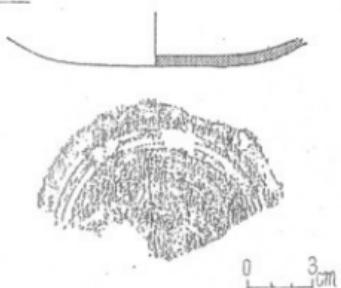
胎土 精選されてるが、
整形 細石少量 微細銀
雲母多量に含有
内部にロクロ痕あり、身の内側に入
る隆線帶あり外部
の頂部は削土する
(右から左に廻転さ
せる)
色 灰青色
焼成 良好

No. 54 図



Sq No. 4 出土したその他の土器類

No. 56 図



胎土
整形
白色砂多し
ロクロ痕がかすかに残っている
内外ともに磨かれている
脚内の底部は整形したままである
左から右に白点の見られるのは
ロクロの迴転方向を示すものである
脚の付け方
1.の沈線は脚取付けをよくするもの
2.は糊粘土を付けたところ
色
焼成
暗青色
良好

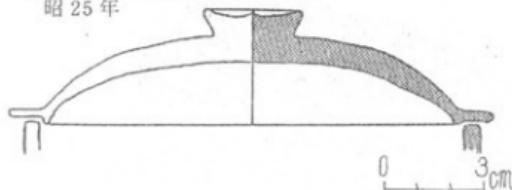
No. 55 図



胎土
整形
白色砂少量含有
内部にロクロ条痕あり
底は糸切り平底
灰青色
良好

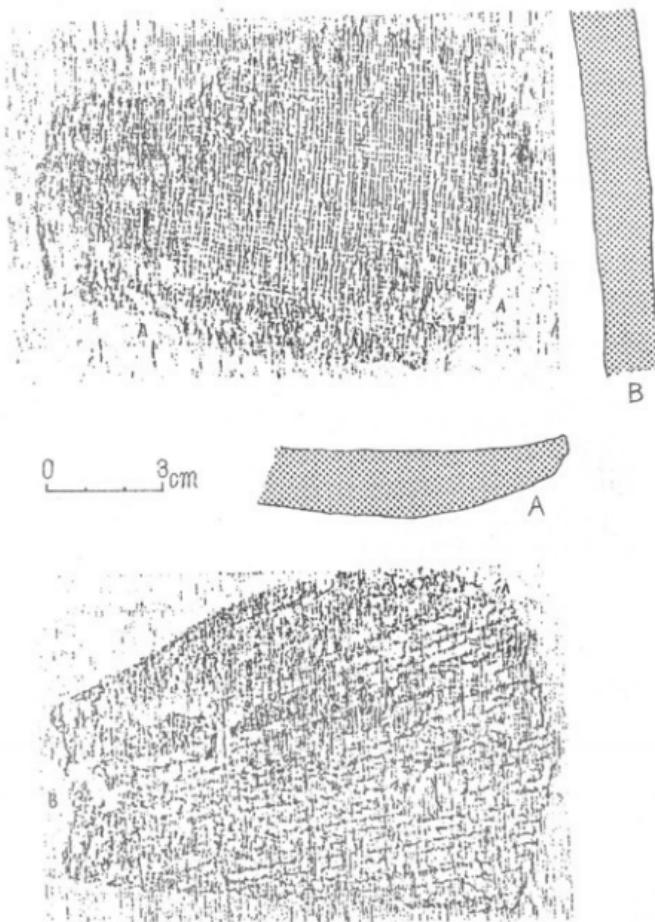
No. 57 図

骨ツボのフタ（火葬壙）
泉の番外地（開拓道路東）出土
昭 25 年



蓋 胎土
整形
白色細砂含有
内部は平滑で、ロクロ条痕あり
外部はロクロ条痕あり、ツマミ付近は削りする。
ツマミ中央の突起が低い
色
焼成
藍青色
良好
使用
廃物利用か

ツボ 形
色 厚さ 5 mm 位、口径 15 cm 位、底径 12 cm 位、高さ 30 cm 位
葬法 褐色だった
基數 2 尺か 3 尺下にあり、周囲に木炭を詰めてある。
桑苗を植えるのに機械掘りをしたので詳細は不明である。
10 基位あったよし（成島幸男氏談）



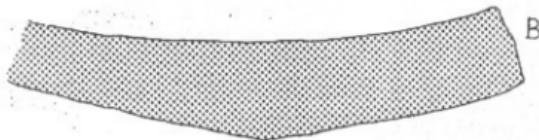
胎土	精選	目
整形	表裏	布繩
色	暗青色	
焼成	良好	
出土	唐ヶ崎	

No. 59 図



精選
胎土
整形
色
焼成
出土地

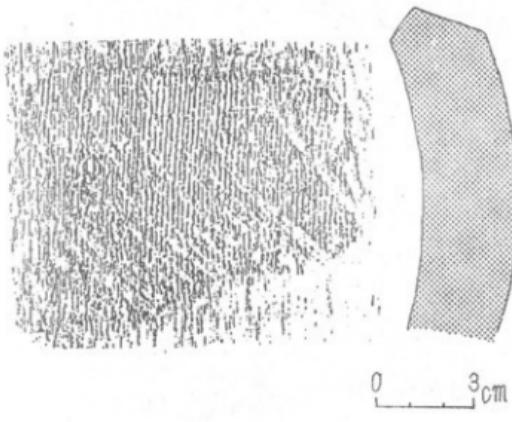
表 布目
裏 繩目
灰青色
良好
唐ヶ崎



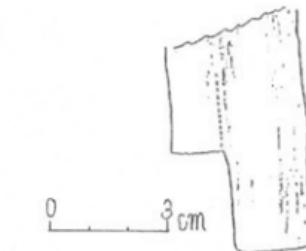
0 3 cm



No. 60 図

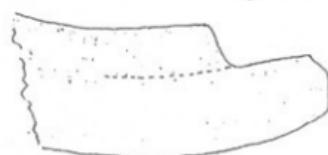


No. 61 図

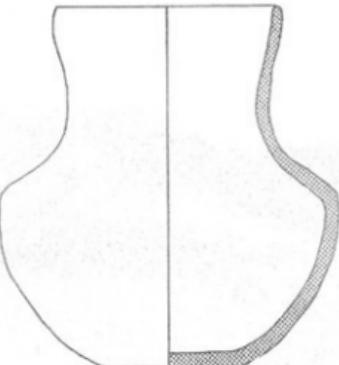


胎土 白色細砂少量
整形 表 布目
裏 繩目
色 灰青色
焼成 良好
出土 唐ヶ崎

胎土 砂質土
整形 二枚重ねた
色 褐色
焼成 良好
出土 さわるとザラザラ落ちる
唐ヶ崎

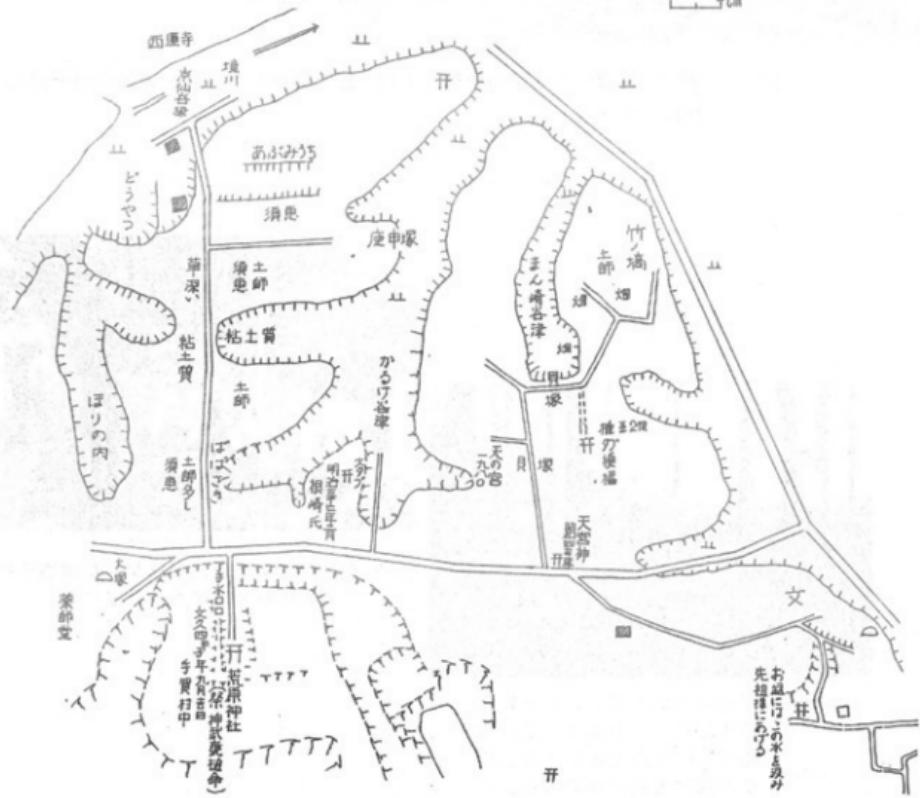


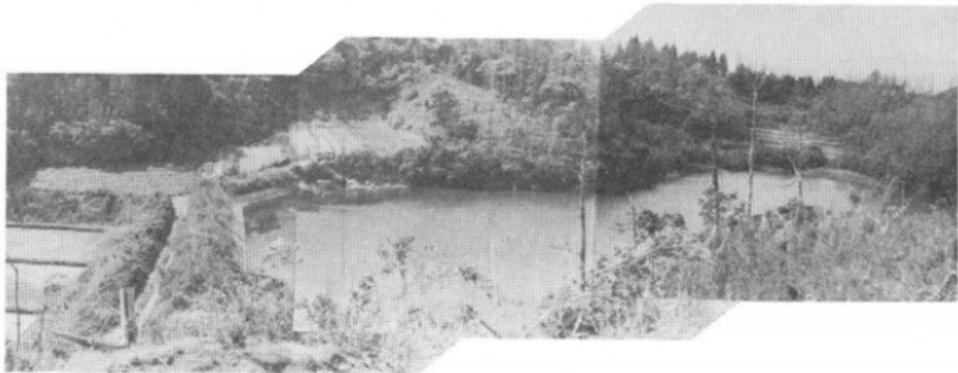
No 62 図 手賀竹の塙近付の略図と
ばばさき出土土器



0 2cm

ばばさき出土
(昭 29.4.3. 飯田忠治氏)





写No.5 姥ヶ谷池 長者平の西側にあり、堤を補修して、鳥名木谷津の水田に利用している。



写No.7 長者平のNo.1号区。2m先は削土されて、崖になつてゐる。
遠くに白くみえるのは霞ヶ浦
その向は出島台地である。



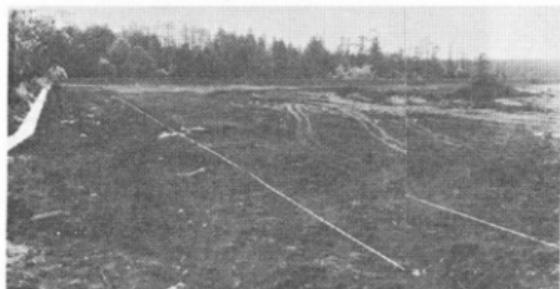
写No.6 野原幸之助氏が採集した植物を作業員の人達に説明している。



写No.9 長者平No.1号区の出土状況
左手の土器片は、須恵器の
「こしき」の底部片である。
(No.21図参照)



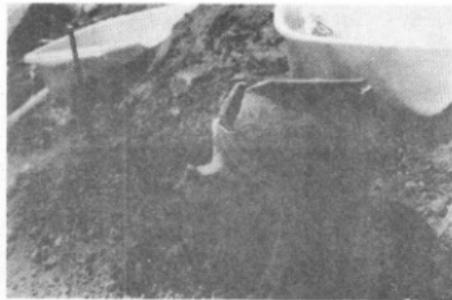
写No.8 長者平No.1号区の出土状況
No.9図参照



写No.10 原遺跡B地区の駐車場用地。右手は野球場、左の白帯は排水溝で、向こうの森（東）の方に傾斜している。30cmから100cm以上削土して、東の斜面を作り、更に盛土して堅めてある。



写No.11 若妻会員の一日研修作業
私達の先祖の生活をみるの
だと、夫婦で参加した数組
もあった。
地図作製もやってのけた。



写No.12 諸井出土の「こしき」
井川芳男氏所蔵（No.22図参照）



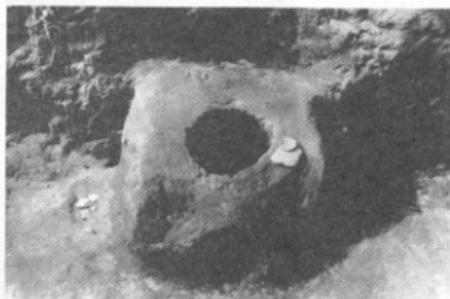
写No.13 原遺跡No.1号住居跡の土器片
出土状況（No.15図参照）



写No.14 No.1号住居跡の出土状況
(No.15図参照)



写No.15 No.1号住居跡の「カマド」から
須恵器の蓋が出て来た



写No.16 正面からみた「カマド」
No.18図を参照して下さい

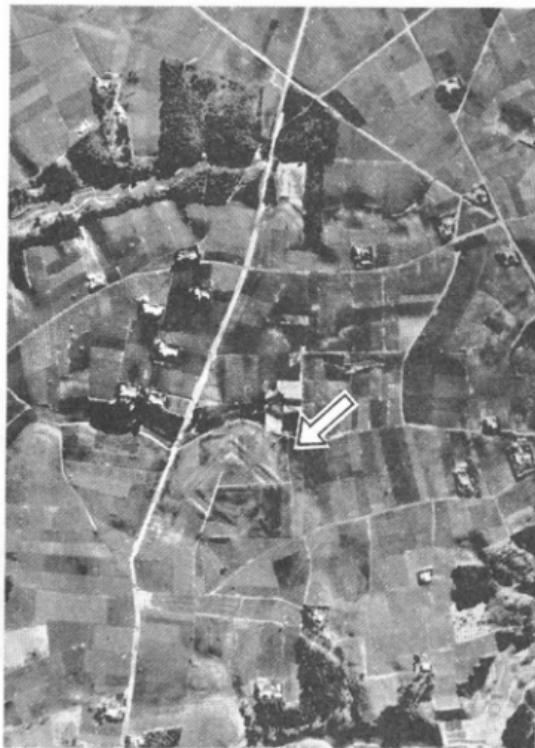


写No.17 西側からみた「カマド」
小さい孔は通風孔である

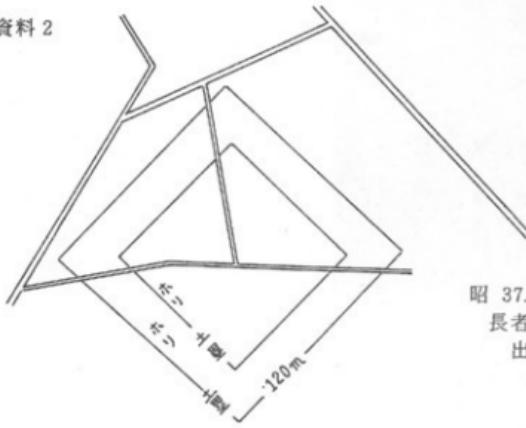
写No. 18

長者屋敷（玉造町蔵の航空写真）

白線は土塁。黒線は濠である。下図と対比してみてください。
中央の道路は開拓道路（鹿島街道）。手前の池は大清水池です。



資料 2



昭 37. 4.4. 読売新聞

長者やしき（井上長者園輪）
出土器

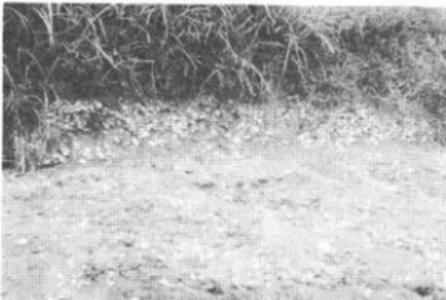
1. カワラケ（土師）
2. 須恵器
3. 布目瓦

写No. 19 原遺跡の方墳（No. 1号）
1辺が5.2m 高さ1.2m。
墳丘上の三角柱に
宝永四亥天五月廿三日
奉修廿三夜待之所。}とある。
来光院

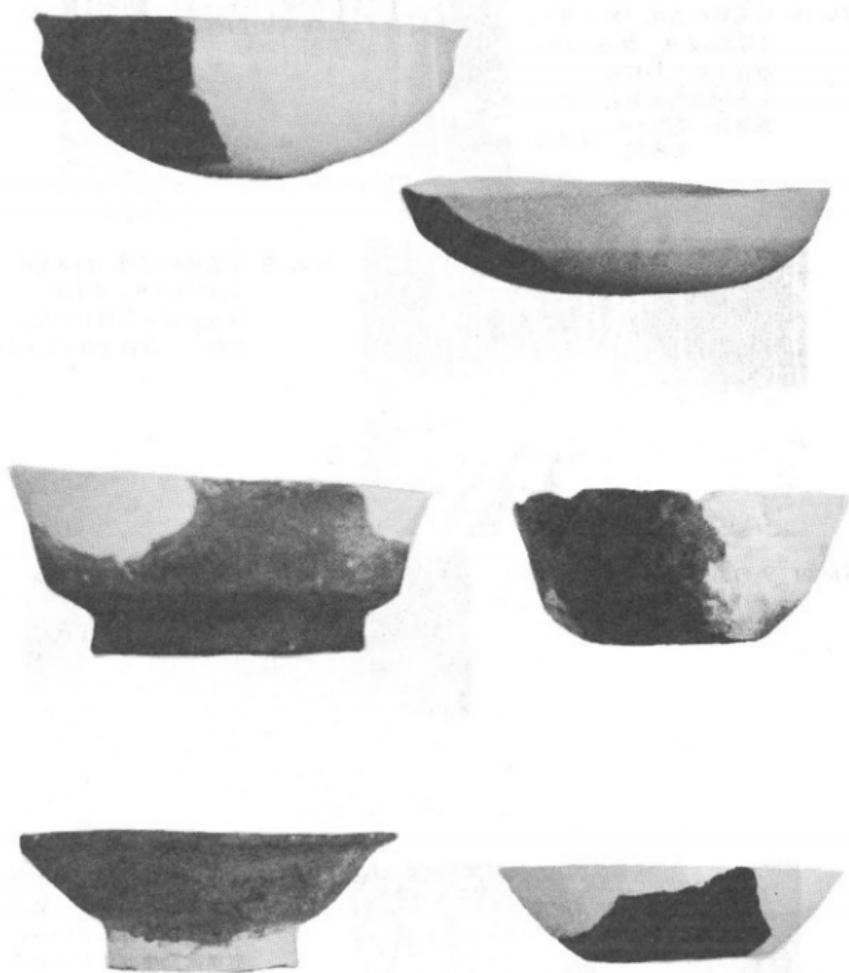


写No. 20 原遺跡の方墳（No. 2号）
1辺が6.2m。平石に
宝永四亥天五月廿三日。
奉修廿三夜待之所。とある。

写No. 21 天の宮貝塚（手賀の竹の塙）
A,Bの二ヶ所あり、縄文中期
の貝塚



写No. 22 持福寺の東方崖下にあり、
お盆にはこの聖水を汲んで先祖にあげるという。
宿集落発生前よりの井戸であろう。

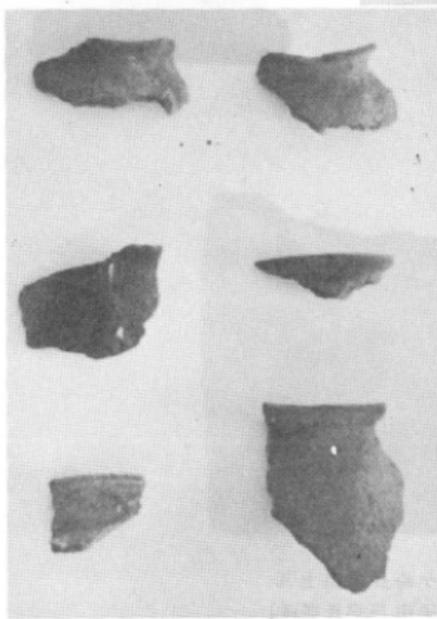
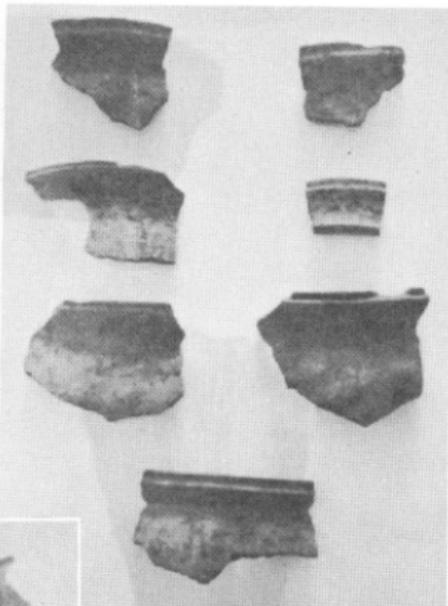


写No.23 出土土器（復元済）



写No. 24 唐ヶ崎長者出土瓦
(神子田三男氏寄藏)

長者平（A 地区）
出土土器「甕」
如右



原遺跡（B 地区）
出土土器「甕」
如左

写No.25 出 土 土 器

終りに

調査目標に到達して、手鹿・疏称毘古や各長者の一端でも解明したかったが、各種の課題を発見したことで、二次調査に希望をもって終ります。課題とは

土器について

1. 土師器が何時頃に生活具の坐を下りたか。
2. 葉底（木の葉の表・回転台の代用）はいつ迄造られたか。
3. 須恵器の伝来路と時代—窯跡は。
4. 粗などの圧痕や舟の線絵がほしかった。
5. 木器の一端でも知りたかった。

住居跡で

1. 出入口の構造を正確にしたかった。
2. 竪と屋根の関係をより明確にしたかった。
3. 軒が地を離れたと思うが、判明しない。

古墳

1. 葬法と貝塚（若海貝塚から人骨が沢山出たと伝承されている）

2. 古墳

高塚墓——円墳と方墳
横穴墓——不明

地下式墓——
火葬墓——十余基

農耕・土木工具（水田開拓と耕作・池作りと水路作り）等から工具を知りたかった。

池の文化

桓 聖 元 元 持	孝 推 武 正 明 統	推 武 正 明 統	繼 仁 德	垂 忠 德	崇 神	天 皇
日本書紀なる	二屯戸 十市倉。高十五 一年大溝。 壇上の池。 岐傍の池。 和河の池。	五十市冬。 の池。依藤原の池。 肩岡の池。菅原の池。 河内国に	諸國に令して 多く池溝を開らしめたまひき。数八百あり、農業事とす。	十一年冬。 劍の池、輕の池、鹿垣の池、巻坂の池を作る。	諸國は内に下の本にして、民の待みて生くる所なり。 今河内の狭山の増田水少し。それ多に池溝を開いて、民の業を實にせよ。	六十二年秋七月二日、詔して。 の事に怠る。それ多に池溝を開いて、民の業を實にせよ。
常陸國風土記なる	千生連磨、初めて其の谷を占めて、池の堤を築かしめき。 香島に向う陸の駅道なり。 桙の池（惣領高向大夫の時）	郡より西の谷の葦原を以て、墾闢きて新に田を治りき。 根本寺創建	白鳥の里。 池を造り、堤を築かんとして、得作成らざりき。	田の里。古都比古	近江の國の鎌谷の陶人は	常陸國風土記
西蓮寺建立	火葬	佛教伝来				そ の 他

古代の植物

野 原 幸之助

一、はじめに

はるか古代に思いを巡らせば、私たちの祖先は、海に開くここ泉の台地に居を構え、永い間住んでいた。暖帶性の植物と温帶性の植物の接点でもあるから、植物の種類も多く、生育にも恵まれたこの地は、当然住居を定めて生きていく上にも最も適したところであつたろう。山と海の幸の多い自然の中で、草原に狩猟し、海に出ては漁労、森に入つては採集などをしながら生活してきたと思われる。折にふれては丘に坐して草花と語らい、森にささやき、自然を相手に安らかな、そして家族的な生活を営んできたことであろう。

今、私たちは、これら先住民の生活の跡を追い、悠久の時を越えたふれあいを求めて、祖先の息吹きのする遺跡を尋ねてみた。そして当時の自然や生活に郷愁を抱きながら、現在の植生から類推して、当時生い茂っていたであろう常緑照葉樹林の姿や、先住民と植物とのふれあいなどに想を馳せ、古代の植物についてその一端をのぞいてみるとする。

二、古代の自然と人間の生活

住居跡の発掘から鳥居博士は、有史以前の武藏野における人間の生活を、次のように想像して記述している。

「おそらく、海や川や湧き水や湖の近く、日当たりの良い南向きの、山の出鼻のような高台に、草をふいた堅穴式の堀立小屋をつくっていたであろう。海に近いところは魚や貝をとり、内陸の方ならシカやイノシシ、鳥などを狩り、木の実や草の根を食べていただろう。これらの食物は生でなく、煮たり、焼いたりしたが、その火を作ったのは、燧石ではなくて、ヒノキをすりあわせて発火した。

食器としての土器や土偶もあった。狩猟に使われた石の鎌は、信州に産する黒曜石で作られていたので、この地方との交流もすでに行われていた。水辺の交通には丸舟があつた。出土品から類推すると、このような生活であったらしい。」と。

また、植物化石から見ても、太古の関東平野は、コナラやクヌギなどの落葉広葉樹を交えた照葉樹林の森でおおわれていたことが想像される。

縄文時代の植物食を研究している渡辺誠氏によると、その頃の遺跡からは、ドングリの類がよく出土するそうである。クヌギ類、コナラ類、カシ類、シイ類の果実である。特に、関東地方では、照葉樹のカシ、シイと、落葉樹のクスギ、ナラの両方がみつかっている。この頃の人々は、こ

れらのドングリ、クルミ、クリ、トチノキなどの木の実を、重要な植物食として用いていたのである。ただ、これらの木の実を食用にする上に、重要なのはアク抜きの技術である。これらの木の実は、そのアクをとらないと、とても食べられるものではないからである。

降って、照葉樹林帯の農耕文化の発生で、イモ類（恐らくサトイモ、ナガイモの類）の栽培化が行われ、クズやワラビのでんぶんも利用された。同時にこれらの植物のアク抜きの方法も発見されている。

更に時は経って、茶を飲んだり、カイコから絹をとったり、ウルシを塗ったり、柑橘類やシソを食べ、米から酒をつくつたりしたのも、この照葉樹林地帯で生れた農耕文化の名残だといわれる。

三、照葉樹林とは

現在の植物生態学の教えるところでは、まだ人類の手が殆んど加えられていなかつた頃の、この辺は、照葉樹林といわれる姿の森林でおおわれていたろうと想像される。

照葉樹林とは、シイやカシノキ、クスノキ、ツバキ、タブ（イヌグス）、モチノキなど葉の表面に光沢のある、常緑の広葉樹だが、これらの樹種が、今日でも重要な庭木であることから見ても、日本人と照葉樹林との縁の深さがしのばれる。

すでに久しい昔から、武藏野には照葉樹林の姿は殆んど消えてしまっているが、日本の各地には、或は大規模に、或は小ぢんまりと、照葉樹林は残されてきた。社寺林にその面影がしのばれる。いや林相としては消え去っても、そこに生れた照葉樹林文化の名残りは、現代に至るまで、綿々と受けつがれている。

若し、当時の照葉樹林の面影の断片をしのぼうとするならば、すぐ近くの夜刀の神社林にその姿を見出せるであろう。そこは小規模ながら、長い年月の間、神の禁忌のため、人の手があまり加えられずにいたので、照葉樹林の姿



写No. 26

神社の森として残っている照葉樹林

が不完全ながら残されている。お宮の森に茂るシイ、シラカシ、タブノキ、ヤブツバキ、モチノキ、ヒサカキなどがそれを物語っている。

なお、原生林の変容したマツ林やスギ林、コナラ、クヌギの雜木林や、スキの草原も、もとは照葉樹林であったことが、植物の分解者である土壤動物のダニ類の生棲種類によつて、証明されることがある。

「常陸國風土記」によると、行方郡の主要産物の第一は馬であるという。麻生の里から筋骨たくましい立派な馬を産出した。と記してあり、天武天皇の時、大生の里の建部の袁許呂命、この野の馬をとつて、朝廷に献上したとある。

人類の遺跡から、馬の骨が出土するようになるのは、繩文時代の前期末から後期にかけてである。縄文後期には日本全土で馬が発掘されているが、特に関東地方に多く集中している。これも常緑照葉樹林の遷移から牧草地と関連づけて、この辺が馬の産地であったことが理解されよう。

植物の遷移から見ると、関東平野を含めて、南日本の平地の大部分を占めていたと思われる原始的植物相の、シイやカシ類などの常緑広葉樹（照葉樹ともいう）林を切り開いて、そのまま放つておくと、クヌギやコナラなどの雜木林になる。この場所で、毎年繰り返して低木を切り取つたり、草を刈つたり、家畜を放牧し続けると、林になることが出来ないで、スキやシバの草原となってしまう。このスキ原も、採草や放牧をしないでおくと、数十年の間に

は雜木林に変っていく。だからスキ原のままで長くおくには、絶えず人工を加えなければならない。言い換れば飼育用採草や放牧により、馬の生産に適した草原が多かつたことが想像される。

四、古代の身近かな植物

先にも述べたとおり、この辺の原祖生は、照葉樹林であったと思われる。照葉樹林は、いいかえれば常緑広葉樹林ともいえる森林で、シイ、タブ、カシなどの、一年中葉の緑を保つていて広い葉の木を主として、これにモミ、カヤなどの針葉樹やコナラ、クヌギなどの落葉樹の混つた林である。この林の低木には、ヤブツバキ、モチノキ、シロダモ、アオキ、ヒサカキなど暗い林内に適した樹種が多い。林床を飾る下草には、シニンラン、ヤプラン、キンラン、ジャノヒゲ、ビナンカズラ、ティカカズラなど多種多様な草木に恵まれ、また、常緑のシダ類の多いのもその特色である。

多數の先住民の住みつきと開発によつて、この常緑照葉樹林は、雜木林やスキ原や田畠に變ってきた。これに伴つて、そこに適応する植物の種類もふえ、草原は四季に応じて花野になつたことだろう。

さて、ここで文献にみられる植物を通して古代の身近かな植物を眺めてみるとしよう。

〔一〕風土記や史記などに見られる植物

地形と気候に恵まれ、南方系、北方系植物の錯綜するこの地の植物の一端を、「常陸國風土記」に求めるに、櫟

(クヌギ) 柴、櫻(ケヤキ)、椎、松、栗、榎(エノキ)、椿(ツバキ)、榆(ニレ)、麥門冬(ヤマスゲ)、ヤブランのこと)、柞(コナラ)、橘、竹、麻、箭(ヤダケ)、茅などがみられる。

春は百草の艶花が咲き競うと表現されるように、多様な美しい草木の花が見られ、秋は千樹の錦葉とめでられた落葉樹林が、四季折々に人びとの心をなごませたことである。

社寺の森にはシイ、スギ、マツ、タブ、モミ、ケヤキなどの巨樹、老木が茂り、土産神鎮守の森として、地域の人びとの心をなごませてきたことだろう。屋敷を守るシイ、カシ、ケヤキ、マツ、タケ、イヌマキなどが四方を囲って風雪を防いでいる。

また、「万葉集」に詠みこまれた植物名もかなり多い。参考までにこの辺に見られる万葉植物の一部を列記してみよう。エゴノキ、ハンノキ、ニワトコ、ネムノキ、アカメガシワ、メダケ、クヌギ、コナラ、カシ、オキナグサ、チガヤ、ノハナショウブ、ヤマユリ、キキョウ、ヨメナ、ツユクサ、ススキ、コブナグサ、オケラ、コウヤボウキ、タチツボスミレ、ヤブコウジ、ヤブラン、セリ、トコロ、メハジキ、

マコモ、ツルマメ、クログワイ、マツ、……など枚挙に暇ないほどである。

この他にも各種の史記や文献等に古代の植物が多数記載されている。

〔二〕食糧としての植物

古代の食生活は、当初は狩猟、漁労、採集により、更に進んで農耕栽培による補足の生活だったろう。ここで当時の植物利用の例を挙げてみよう。

シイ

シイは暖帯林の代表的な木で、遠く朝鮮の時代、照葉樹の林の発達した處に、私たちの祖先は特殊な農耕文化を作り出したという。シイの生え恵まれた自然の中に、素朴な農耕と採集との生活を営んでいたその頃の人びとは、季節が来て山にシイの実が熟れると、それを取って食べ、そして大事に貯蔵もした。

「常陸國風土記」を見ると、提賀の里の条に、「草木は椎、栗、竹、茅の類多く生る。」とある。シイの実はクリかヒシの実に似た味がして、生で食べたり、炒って食用とする。農耕文化の発達する前は先住民の重要な食糧であり、農耕時代に入つてからも救荒食糧として大切だったことは、いくつかの古墳からその実が発見されていることからもわかる。昔、この実を神に供えたといい、延喜式には、天皇に

献上したと書いてあり、或る古書には、「穀食の不足を助け荒蕪の飢餓を救うものにて、ただに菓子となすべきものにあらず」と書いてある。

2 カシ類

シラカシが一番多く屋敷林として、生垣や防風樹に植栽されている。この他にアカガシ、アラカシ、ウラジロガシなどカシ類は種類が多い。カシとは、かたじで堅い木の意味であり、堅果は「どんぐり」として、多量の実がなる。縄文時代、その頃の人びとは、カシの実を食糧にしたといい、縄文晩期の遺跡から貯蔵された多数のカシの実が発見されている。

またリス、シカ、クマなどの野生動物の大事な食糧源となっている。

3 クヌギ、コナラ

クヌギは古名をツルバミといい、古代からの野生植物で、化石も多く出る。暖帯の山林に普通に見られる。樹皮には、染料やなめし皮用のタンニンを多く含んでいる。万葉集に、「橡（ツルバミ）の柵の衣裏にせば……」などと歌われてゐるが、やわらかいイガに半分包まれた「ヒトツミノクリ」の如きこの実は、当時の庶民の衣服の染料であった。勿論この実はコナラの実と共に「ドングリ」と呼び、縄文時代以来救荒食糧でもあり、家畜の飼料でもあった。

中国の詩経にはクヌギを「櫟」「柞」と書かれ、葉は柞蚕の飼料となる。

4 クリ

日本中いたるところに野生し、山の動物達の重要な食料ともなっている。野生の実の小さいものをシバクリと呼ぶが、たくさん集めれば主食の代用になるので、古代から食生活には大いに利用されていたに違いない。クリの実を干して白で搗ち、殻と渋皮を取り去ったものが搗栗（カチグリ）で、長く保存できるので非常食にもされた。

クリという名は、黒実からきたといわれ、黒皮と種皮である渋皮を取り、その中に子葉が二枚つまっている。食べるのは子葉の部分で、でんぶんと糖分が主成分となり、穀物に似た栄養価値があるから、古代から貴重な食糧として利用されてきたことだろう。

七世紀末の持統天皇の時代には、すでにクリの栽培が奨励されている。

5 カシワ

カシワは古くからその葉を炊事に使い、和名は「炊ぐ葉」つまり食物を盛る葉の意味である。しばしば庭にも植えられ、また山火事の跡などにもよく生育する陽樹である。葉は大きくて両面に星状毛を密生しているので、カシワ餅など食べ物を包んで蒸しても、葉にくつつかないので重宝がられ、また、食物をその葉の上にのせて、いわゆる「かしわ」（炊ぐ葉）として利用した。

樹皮にはタンニンを多く含み、皮革をなめすのに用いられる。中国では、絹糸を得るために、この葉で絹糸を

とするサクサン（柞蚕）を飼う。葉は殆んど無柄だが大きく、質は厚く、長さは12～30cm、縁には大きな波状の鋸歯がある。

ドングリは、年内に熟し、楕円形から球形で長さは1.2cmである。

6 トチノキ

今はこの辺にトチノキの野生は見られないが、庭などに植栽されているのをよくみかける。もともと全国に分布して自生する高木で、葉は五～七枚の掌状複葉である。六月に開花し、十月に熟して厚い果皮が三裂し、一～二個の種子を出す。種子にはでんぶんが多く含まれていて、繩文時代の遺跡からも貯蔵した種子が出て來るので、すでにその頃から主要な食糧として利用されていたらしい。

トチ餅は、決を抜かない食べられない。木灰を入れて苦味を除き、更に水にさらす。

二 生活を潤おす植物

「常陸國風土記」は行方郡の主要産物として、麻生町の里に郡家あり、その郡家のある付近一帯は、橘（柑橘類）の産地であった。また、麻生の里には麻の記事もあり、当時はここ玉造のこの地も地形、気候の上から見てこれらの植物（作物）は、当然作られていたと思われる。

1 食事に係わる植物も挙げてみると

○アカメガシワ

全國に分布し、新しい芽は淡紅色をしている。葉は7～15cm、巾5～10cmで、膜質からやや紙質の菱形状卵形、浅く三裂している。カシワの葉と同じように食物をのせるために葉を使ったことによって、赤い芽のカシワ、即ちアカメガシワと名づけられた。

また、この木にゴサイバ、サイモリバなどの古名があり、萬葉の頃は久木と呼ばれている。ゴサイバ、サイモリバといつたのは、昔は、この木の葉の上に食物をのせていたからで、日常の食器としてのほか、神への供えのものもこれを敷いた。

○ホオノキ

ホオノキも全國に分布し、葉は長さ30cm以上にもなり、昔から食べ物を包む柏（カシワ）として利用された。葉の香りもよく、食べ物に風味を添える。

たまたま、昭和五六年十月三日の読売新聞紙上に、次のような報道があった。

「虫歎菌を一〇〇%殺し、副作用もないという生薬が開発された、富山薬大和漢薬研究所で二年がかりの実験の結果、殺菌作用を持つ和漢薬の中から、ホオノキの樹皮（厚朴）が、ごく少量で“虫歎菌”を完全に死滅させることを突き止めた。さらに予防にも効果のある和漢薬を見つけている。……」。と、古代の人びとが本能的に、または生活の知恵

からホオノキの葉を食器代りに使って、虫歯予防をしてい
たわけでもあるまいが、思い出したので参考までに付記し
たわけである。

2 薬用植物について述べてみよう。

○ヤブラン

「常陸國風土記」は、香澄の里に麦門冬（ヤマスゲ）あり、
これを朝廷への貢献として使用されたと「延喜式」^{えんぎしき}に記録され
ている。麦門冬は一名ヤブランという薬草で、ヤブランの
根のふくれた部分を大葉麦門冬といい、ジャノヒゲのを小
葉麦門冬とよぶ。共に慈養強壮、咳止めなどに用いる。

○ガマ（ヒメガマ）

ヒメガマはいたるところの湿地、休耕田等に自生する。
ガマの花粉は金粉のようで、蒲黄といい、昔から止血剤と
して有名である。「古事記」中のウサギとワニの話で、ウサ
ギが大国主命の教えの通り、「水門の蒲の黄（花粉）」を
体につけたら治ったのもこれである。

○セリ、ノダケ

「延喜式」には、食用のほかに薬用にもされ、早くも栽培さ
れたことが記されている。
また、ノダケについても「延喜式」や「出雲國風土記」には、ノ
ゼリとして出ている。薬草として昔から知られた草で、解
熱、発汗剤として利用された。

○オトギリソウ

「大和本草」に、葉をもみてその汁を外傷に塗りて血を止む。

また、タカの病とイヌの病を治すと書いている。

○その他、生活経験からセンフリ、リンドウ、ニガキなど
を健胃剤に、ゲンノショウコを下痢止めに、ドクダミを毒
下し等々、当時も多数身近かに生えていた植物を利用して
いたであろう。

3 食用としての山の菜 野の草

○ガマズミ

子どもの頃、晩秋にこの実をとって食べたものである。
少し渋くすっぱい甘みがあって、あまりうまくはないが、
自然のものを食べる喜びがあった。この実は、縄文時代後
期、晩期の人びとも好んで食べたらしく、土器にこの実の
圧痕のついてものがみつかっているという。

○ホウコグサ

春の七草のオギョウで、一〇〇〇年位前にホウコグサ、
母子草となつたという。大和本草には、陰曆三月三日には
ホウコグサを団子に和すとあり、綿毛がつなぎとして利用
された。

○ツリガネニンジン

古名をトトキといい、日本・韓国共通の名である。古く
からトトキと呼ばれて若い苗は山菜として有名である。山
でうまいのはウケラにトトキといってツリガネニンジンは
賞味されてきた。

古名をウケラという。「万葉集」にも「武藏野のウケラが花

…と詠まれて、武藏野の名花であった。根茎は蒼述といつて薬用にする。

武藏野の名花であった。根茎は蒼述といつて薬用にする。

ルの古名)として昔話が書いてある。

○ハス

遠い昔、中国を経て来たインド原産のものだという。長い間栽培されているうちに野生化したものもある。古代の人には特に貴重な食物であった。

4 住居の材料としての植物

○マコモ

太古より人との深いつながりがあり、多くの詩歌にも詠まれている。またカヤと呼ばれて、最良の屋根ふきの材料に使われた。遠く縄文時代、すでに堅穴住居の屋根として使われたといわれている。

○マコモ

「刈りごもの一重を敷きてさ眠（ぬ）れども

君とし宿（ぬ）れば 寒けくもなし」

「万葉集」にマコモの歌が多い。「記紀」にもコモ即ちマコモの出る歌謡がある。その頃は広大なマコモの群落がそちこちにあつたろう。畠やムシロ或は枕などを作つて利用したといいう。

5 生活のちえとして

○ハンゲショウ

「大和本草」に、「農人はこの草の葉が白くなるのを見て、時候を知り、田に種をまく…」とある。ハンゲショウは池沼のほとりや川のふちなどの湿地によく生える多年草で、草全体に一種の臭氣がある。半夏生で、夏至から十一日目即



No. 64 図 オケラ

ち七月一日頃に白い葉をつけるからともいい、また葉の半面が白くなるから半分化粧した意味だともいう。

本草綱目には、「一葉白くなればウメやアンズが食え、三葉白くなればキビが食える」と。

○タネツケバナ

田んぼに群をなして生え、四月上旬頃、田んぼ一面に白い小さい花が咲く。昔は、この花の盛りを見て、種穂を水に漬けた。タネツケバナは種漬花で、農事と植物季節とが、直接結びついていた昔の名残りの草である。

また、草木染、染料としての植物には、

○アカネ

どこにでも生えているつる植物で、根は^{あひな}薄色をし、これで茜染めの原料である。日本で最初の日の丸はこのアカネで染めたといわれている。「古事記」のヤチホコノカミの歌舞語りに、アカネ染めのことが出ている。

○ムラサキ

「常陸國風土記」に、当麻の郷の紫草（ムラサキ）の特産について記してあるが、紫草は今はこの辺に見られないが、古代に自生していたことは間違いない、染料に用いられたものである。

○クヌギ

「万葉集」に「ツルバミの拾の衣裏にせば」と歌われているが、クヌギは古名をツルバミ（櫟）といい、実は当時の庶民の衣服の染料となっていた。

「古事記」や「日本書紀」は歴史もので、植物はその歴史に随伴して現れているものであるが、「記紀」には計九七種の植物名が現れている。しかしこれらの植物には、花を鑑賞するようなものは少くて、大部分は古代人の生活と結ばれている植物である。例えば穀物、野菜の類や先に述べた染料、木材、建築、器具材、衣服料、神祭のサカキ、ヒカゲノカズラ、ミツナガシワ（カクレミノ）といった類である。

この時代の民族は農民的、牧歌的、実用的趣味で、植物によって生命をつなぎ、身辺を飾り、家屋、什器、農具など生活と結ばれている実用的なもので、美意識などはまだ見られない。

こういう原始的農耕の生活にとって、最も人びとが恐れたものは、天候、気象などの自然の脅威であった。そこに抜い、裸、占いなどという神祭の行事や思想が生れた。またこの自然の脅威は、農耕という業ばかりでない。彼等の日常生活と直結して、自然界に対する畏敬、崇拜、感動などという要素ともなり、「日本書紀」に「草木ことごとに能く言語有り」とあるように、樹木に神聖をみとめ、花にも神の象徴をみとめた。神木思想がそれである。神の宿る木として御神木として祭る。咲く花、散る花すべて神の示顕として、それによって豊凶を占う花占いというのも生まれた。サクラ、ウノハナ、ツツジ、アセビなどは、その花

古いに用いられた花であった。

サカキやヒサカキなどが、一般に神事に使われていることは周知のことである。漢字を当てるに、櫛、賀木、栄木などと用いられたのは、古くは常緑樹の総称のことである。中古にはオガタマノキをサカキといつて、神前に供えたりしたが、今ではヒサカキが多い。

1 ヒサカキ

雌雄異株で暖帯林の下木として多く自生している。昔から檜として神前に、お花として仏前に供えられた。サカキに比し、葉が小さく鋸歯があり、花が小さいなどで区別される。ヒサカキとは、姫サカキのつまつたものとか、実サカキのなまり、或はその生育地から陽サカキなどの解釈もある。

「サカキは榮え樹の意味で常緑樹の総称ともいいうが、「大言海」には「境木の義磐境の木の意。即ち神の鎮まりませる地の区域の木」とあるように神域に植えられた木という説もある。

実はヒサカキが地方名でサカキと呼ばれ、実際に檜として使用されている。またサカキをマサカキといつて区別するところもある。サカキの自生は茨城県以南である。時折神社拝殿前にサカキが植えられているのを見る。

2 スギ

スギはもともと日本のいたるところに大木が群生していたことは、登呂や山木の弥生式時代の遺跡から出土した木材の多くがスギであり、またスギの切り株が残っていることなどからうかがい知ることが出来る。

スギは一度切ってしまえば、もとのような群生林を再生することは少かった。そして人間が神を祀って木を切り残した処だけに、古い大きなスギの森が見られた。これらの森は地上に高くそそり立っていることからよい目印になつた。人の目印になるような木は、神の目印にもなり、神もこの木を目あてに来るものと考え、そのはじめは大木を神体としてまつたものと思われる。しかし後にはその木の下に祠を建ててまつるようになった。

勿論スギの大木も御神木として尊んだ。

3 マツ

マツはスギと同じように、昔から巨木は人の目にもつたから、古くから名木として見られたものも多く、神の降臨する木とも考えられた。神靈の宿る木として崇められた。スギの群生が切り残されて神木化したのとは少し違う。

マツは火力が強いので焼き物（かまど）土器製作の燃料にも使われた。更に海岸のマツは塩田の発達につれて、製塩燃料にも使われ切り尽くされていったであろう。

アカマツを焼いて作った炭は軽く、しかも火力が強いの

で鍛冶屋炭として用いられた。鉄の精錬には松炭が用いられることが多い。勿論建築用材としての用途も広かつたろう。

これらの用材として常緑広葉樹よりもアカマツ、クロマツは有用であるため、常緑照葉樹の自然林をマツの二次林に変えていったんだろう想像もできた。

四 自然を友として

先に「記紀」にみる古代農民の自然観について書いたが、それが奈良時代になると、大陸文化を輸入して、人びとは、銀樹崇拝から花を美的鑑賞へと前進した。これを時代の代表作「万葉集」からのぞいてみよう。

1 「万葉集」にみられる植物

「万葉集」に詠まれている一五〇種のうちどんな花が特に多く詠まれているかというと、ハギ（一四一歌）、ウメ（一八歌）、タチバナ（六八）、オバナ（四六）、サクラ（四〇）、クレナイ（二九）、フジ（二七）、ナデシコ（二六）、ウノハナ（二四）、クズ（一八）、ヤマブキ（一七）、オミナエシ（一四）、アセビ（一〇）、ツツジ（一〇）、ツバキ（九）の順で、（）はその歌数を示し

た。

これからみても身近かな野の花が愛好されたことがわかる。特に草では秋草が多い。

「万葉集」には、東歌という関東地方の住人らの詠んだ歌が多く含まれている。万葉の東人たちが自分の眼に映った、現実の当時の武藏野を描いている歌である。それらの歌の句々の中から古代のこの辺の面影をしのんで見たい。

迹しけば 袖も振らむを 武藏野の

うけらが花の 色に出なゆめ

野の花に寄せる女の恋心も、やはり野性のものである。うけらは先にも書いたが、オケラのことである。その葉や花はするどい刺に守られて、その中に純白だが、やや寂しくてすがすがしい頭状花を開いている。古代より武藏野の名花として親しまれている野草である。

道の辺の 荆の末にはほ豆の

からまる君を 離れか行かむ

防人の歌である。ノイバラにからみつくマメのように、とりすがる妻をおいて出征する男の心情を歌っている。都へ向う武藏野の道には、香の強い純白の花のノイバラが生え茂って、歩む足を痛めたであろう。その痛みから、国に

残した妻を恋う胸がうづいたであろう。

2 秋の七草

先に「万葉集」に詠まれている植物には秋の野草が多いと書いた。日本の秋草の代表的な種類として親しまれてきていた、山上憶良が詠んだ秋の七草をみてみよう。

「秋の野に咲きたる花をお折りかき数うれば七くさの花」「萩が花尾花萬花なでしこの花女郎花また藤袴朝貌の花」と詠んでいる。

萩が花は、普通のハギ（ヤマハギ）である。

。尾花は、ススキのこと、カヤともいう。



Na 65 図 クズ

。葛花は、クズのこと、いたる處につるでからむ、根から取ったでんぶんが「クズ粉」。なでしこの花は、カワラナデシコのこと、ピンク色、レース状の花弁が美しい。

。女郎花は、オミナエシのこと、黄色い粟粒大の花が集つて咲く。昔は盆花として用いた。

。藤袴は、フジバカマのこと、ヒヨドリバナに似て、香りある、今はあまり見られない。

。朝貌の花は、キキョウのこと、紫色の花咲き、薬用にもなる野の草である。

これらの花は、秋の野を飾る代表的な野草であるが、決して、派手なきらびやかな花ではなく、野性的、素朴な花であり、当時は却ってこのような花が好まれたのであろう。

3 春の七草

秋の七草が觀賞用を主体としたのに対し、春の七草は、食用としての野の草である。

正月七日の七草粥の中に入れる七種の野草で、鎌倉時代の「河海抄」に、セリ、ナズナ、ゴギョウ（先に書いたハコグサのこと）、ハコベラ（ハコベ）、ホトケノザ（コオニタビラコ）、スズナ（カブ）、スズシロ（ダイコン）があげられている。

時代により、さまざまな野草が、七草の種目に挙げられ

ているが、いずれにしても初春に野草を食べる行事が、雑煮や粥と結びつき、七草粥の形となつたものと思われる。この七草粥を正月七日に食べて、無病息災を祈るならわしは、昔から続いている生活のちえから生れた、年中行事の一つであろう。

内 葉底土器にみるもの

1 出土する植物化石をみる

古代の生活のあとだつた各地の遺跡の発掘によつて、出土する植物の化石を見ると、

広葉樹のオニグルミ、アカシデ、クリ、クヌギ、シイ、マテバシイ、アカガシ、アラカシ、シラカシ、コナラ、ムクノキ、エノキ、ケヤキ、サカキ、エノキなど、針葉樹では、モミ、イヌガヤ、カヤ、マキ、ナギなどが見つかっている。これらは今日の常緑照葉樹林や雜木林に生えている木と同じものである。

特に茨城の地は、植生から見て温帯と暖帯の接点になつてゐる。温帯ではブナやナラ林が多く、暖帯ではシイやカシ林が多くなつてゐる。

これらブナ科の植物は、古代にはもっと多かつたが、広く伐採され、他の木が植林されてきた。ブナ科のうちクリ属は勿論、シイ属、ブナ属の堅果も食用になる。これらは

コナラ属とともに多量の果実を結ぶので、食料にも飼料にもされ、また自然にあつては、クマやリス、シカなどの動物たちの冬ごもりに必要な食糧源でもある。

武藏野をおおつていた照葉樹林に埋まるように、この辺にもぼんばんと人間の集落があつた。そこには自然と調和するというよりは、自然に埋没した人間の生活が営まっていたらう。

玉造町泉集落及びその周辺に住んでいた人びとが、日常用具として使用していた土器は、今回の発掘からみると、土師器と須恵器である。

2 木の葉の圧痕のある土器

出土した土器片から、木の葉の圧痕のある上器が幾つかみられたので述べてみよう。

土器製作に轆轤を使うのは、弥生時代からであるが、土師器製作に当つては、木の葉の裏に粘土を置いて、作製する手法もあったのである。これは、繩文土器の綱代痕—弥生土器の布目痕に統くものであろうと考へられる。

No.66図からNo.70図は、木の葉痕のある「葉底」である。木の葉の裏に粘土を置いて、木の葉の表は回転台の代用にしたものである。そのため、使用された木の葉や草の葉は、厚くて丈夫で表面は滑らかですべりのよいものが選ばれることと推測される。目的からみて常緑照葉樹か、落葉樹でも大きい葉が考えられる。また、小さい照葉樹を数

枚使うことも考えられる。さらに、既に農耕作業もみられるので、農作物で葉の大きいものや、樹林内の野生の草木を使うこともあり得るだろう。

No.66図は、葉脈が太く相当大きな葉が考えられる。中尾

左から右へ削土する。中尾

No.67図の葉底は、ヤブニッケイやシロダモなどクスノキ科の葉脈らしい感じもある。光沢あり表面滑らかな葉である。

No.68図の葉底は、カシワなどブナ科の大型の葉脈らしい。

No.69図の葉底は、タブノキなどのクスノキ科のなかまではなかろうかと推測される。

No.70図の葉底は、ホオノキなどの大きな葉ではなかろ
か。

No.66図

整形

内部一なでた葉痕多し
外部一底部近くは右から左へ削土整形する

葉底



氏によると、「照葉樹林文化は、熱帯降雨林の根栽文化から、わずかばかりの作物品種—タロ・イモの一部のサトイモを受けとることができ、またヤムイモでは温帶性のナガイモを栽培化し、それを更に日本まで伝播させたが」といっている。

これらから考察すると、サトイモ科のなかまの葉脈に似ていると推測される。表面を回転台の役目には恰好のものであろう。

No.68図

整形

葉底 底径 8.4 cm
内部は平滑、外部に窪み
削り痕あり



No.69図

整形

葉底 底径 8.4 cm
窪んでしている



No.67図

整形

葉底 底径 7.2 cm

内部に輪積痕あり

外部は右から左へ削土する

（略）



No. 70 図 整形 葉底 底径測れない
内部は指でなでる

何れにしても、出土品

は永年使用された後土中に埋もれ、摩滅や破損等甚だしく、葉脈のほんの一部の圧痕から類推する

ことは至難の業である。

当時は身近かな植物であり、土器製作の目的と植物の特徴から利用された圧痕の葉脈からの判

断で概要をのぞいたに過ぎない。

五、泉原の現在の植物を尋ねて
〔ボンベイの遺跡を尋ねて〕

南イタリアのベスピオ火山のふもとにあるボンベイは、周囲3km、当時の人口約2万の都市であったが、約一九〇〇年前のベスピオの大噴火で、一夜にして埋没してしまった。

発掘されて当時の建築物や調度品にいたる全貌が明かにされ、都市全体が当時の面影のままに残されている。私は昭和五一年一二月、海外教育視察團の一員として、この地をつぶさに観察し、古代文明のすばらしい遺産に接

することができた。

しかし、私の胸を強くうち、脳裏に鮮やかに焼きつけられたものは、静かな遺跡の片すみにしおらしく咲いている何種類かの野の雑草であった。その土地に適して、その当時から咲き続けていたであろう人里植物たちである。

これらの野草に接した瞬間に、私は古代のボンベイの人々とのふれあいができた感を抱き、じつと可憐な花を見つめることによって古代人との対話のひとときを過ごすことができたのである。

〔泉原の遺跡に立って〕

ボンベイの夢からさめて、再び泉原の遺跡に立ってみる。先に海老原先生が述べられているように、この地は古代より立地上恵まれた環境にある。気候、風土、交通などに恵まれているので、先住民の生活の場としては最適であろう。

また、暖帯と温帯性植物の接点でもあるので、植物の種類も五〇〇種を数えるほどである。人びとの生活を取りまく植物資源にも恵まれているわけである。

いま、私たちは、先住民の遺跡発掘により、当時の人びとの使用した地下の土器と、そこに古代より連續と咲き続けてきたであろう地上の花を通して、先人とのふれあい、言葉なき心の語らいが出来るのである。

町の発掘作業に参加された皆さん方には、作業は共につらかったが、古と今、人と自然とのふれあいの得難い体験をされたことを重ねて喜び、かつ改めて敬意を表する。

〔二〕現在の植物の姿を眺める

さて、発掘当日参加された方には、泉原の植生の一部について、お粗末な説明をいたしましたが、稿を改めて先に解説いたしたところと重複しないように述べてみよう。

1 常緑照葉樹が多い

先に述べた通り、この辺は暖地性の常緑樹林帯であるので、シイ、シラカシ、アカガシ、タブノキ（イヌグス）、ヤブニッケイ、クスノキ、モチノキ、ヒサカキなどの木が多い。また、温帯性のコナラ、クヌギ、クリ、ケヤキ、エノキ、アカメガシワなどの落葉樹も混生しているので、四季折々の山の美しさは格別である。

これらの樹林の下草としては、サネカズラ（美男カズラ）マツリヨウ、ツルグミ、イタビカラズラ、ティカカズラなど暖地性の植物も見られる。サネカズラは夏に白色の花を飾り、秋になると小さい球形の液果が、花托のまわりについて共に赤く熟して、大型の金平糖のような実がなる。一名

美男葛といい、昔、枝の皮の粘汁を水に浸出して、その液で男子の頭髪を整えたからだという。

2 食べられる木の実、山菜が多い

木の実としては、ウグイスカグラ、ナツグミ、アキグミ、ツルグミ、ナツハゼ、ウシコロシ、ナワシロイチゴ、エビズル、ガマズミ、シドミ、コウゾなどがある。

ウグイスカグラはこの辺ではナワシログミなどともいい、四月に淡赤紫色の花を開き、五月にはルビー色のすきとおる実をぶら下げている。ウシコロシは幹が硬いので鎌の柄にも使われるので、一名カマツカともいう。なお、古老の話では、田んぼに堆肥を背負って運ぶタガラを作るのにウ



No. 71 図 サネカズラ

シコロシの木を使ったそなうである。古代から農具などに用いられたことはうなづける。エビズルは今の子ども達には殆んど関心もなく、有毒なノブドウと混同している者も多いようである。

次に食べられる野の菜、山草にはタラノメ（タラボウ）やハリギリ（イヌダラ、ホンダラともいうそうです）、ウコギ、サンショウの芽を始め、オケラ（古名でウケラ）、ツリガネニンジン（古名でトトキ）、ノアザミ、ワラビ、ホウコグサ（古名でオギヨウ）、ヨモギ、タンポポ、フキ、ノカンゾウ、ヤマノイモなどがある。

特にサンショウの利用価値はすばらしいが、往々にしてイスサンショウと間違いやさしいので御用心方を。簡単な見分け方は刺の着き方に留意のこと。サンショウの刺は対生（左右向いあって着いていること）であり、イヌサンショウの刺は互生である。

3 民間薬や毒草のなかまも多い

毒下しのドクダミ（デゴクソバ、ジュウヤクともいう）下痢止めのゲンノショウコ、健胃剤のセンブリやニガキ、その他クコ、アマドコロ、スイカズラ、キヨウ、リンドウ、ウツボグサ、オオバコ、オトギリソウ、クズなど数多い薬草に恵まれている。

これらの草は、私たちの祖先の長い間の生活の知恵から出た尊い文化遺産でもある。

古老にうかがえば、この他にも種々民間伝承薬があるし、用い方なども多様である。

これに反して時には毒草や思わぬ危害を加える植物もあって、自然界の厳しい仕打ちを受けることもある。先づ人に恐れられるのはヤマウルシやツタウルシである。俗に漆かぶれという皮膚病である。さらに案外長時間刺戟で痛いのがイラクサにふれた時である。その他に一般に有毒として嫌われるものには、ヒガンバナ（マンジュシャゲ）、エビズルと誤認しやすいノブドウ、田んぼに多いキツネノボタン、タガラシ、センニンソウや山に自生のエゴノキなどがある。

また最近花粉公害で人びとに嫌われている帰化植物のブタクサがある。いたるところの路傍にふえ、夏の頃に黄色の花を咲かせ、花粉をまき散らし、鼻や気管の粘膜にアレルギーを起すという。

4 分布上珍らしい植物を見る

この地が昔、海の入江であつたため、海辺性の植物も多く自生している。

コモチシダは子持ち羊歯で、葉の上に不定芽が出来るシダで、昔の海岸に沿つた崖などに生えている。トベラは暖地の海岸地方に自生している木で、地方により節分にこれを屏にはさみ、鬼をよけることがあるのでトビラノ木といふ。春白い芳香ある花を咲かせ、冬には実が裂けて赤く美しい

じい。農家の畠などにふえ始めると除草に手古するハマス
ゲ（一名コウブシ）も海辺河原等の砂地に多い雑草である。
その他スダジイ（普通のシイ）やテリハノイバラなども海
岸地方に多い植物である。

次にこの地区ではあまり見られないと思われる珍らしい
ものについて略記してみる。



No. 72 図 ハンショウズル

似ているので、衝羽根空木の名がつけられた。これも良者
平一帯に多数自生していた。

カエデドコロ（ヤマノイモ科）は、暖地性の植物で、葉
の形がカエデの葉に似ているドコロである。

タカアザミ（キク科）は、北方系のアザミであり、暖地
性の植物の多いところに北方系の混生も珍らしい。この他
ミヤマナルコユリなどもみられた。

モウセンゴケ（モウセンゴケ科）は、食虫植物の代表的
なもので、陰湿地に自生しているのは貴重な存在である。
一葉の表面には毛織りの毛氈のように腺毛が多く、その先
端からの分泌液のため小さい昆虫は捕えられ、消化されて
しまうのである。

5 婦化植物が今までの植生を変える

外國から新しい生活環境を求めて入ってくる植物は、相
当なやせ地でも適応していく。これが開拓者の根性
なのだろうが。

開墾や宅地造成、道路工事等で表土の削り取られたやせ
地は、從来そこに生えていた植物にとつても住みにくい。
しかし婦化植物は進んでそこに住みついてどんどん殖えて
いく。

ツクバネウツギ（スイカズラ科）は、五月頃黃白色の花
を咲かせ、花の終った後、果実の頂に永存する五つの葉片
は、正月の羽子つきの衝羽根に似ており、木の姿は空木に
見られるが平地には少い。うばが池に接した長者平の松林
中には多数見られた。

代表的なものがセイタカアワダチソウである。その他ヒ
メジョオン（テンチヨウガサ）ハルジオン、アレチノギク、
ヒメムカシヨモギ、ニワゼキシヨウ、ダンドボロギク、ノ

ボロギク、カモガヤ、イヌムギ、セイヨウタングボボ、アメリカヤマゴボウ、ブタクサ、アメリカセンダングサ、メリケンカルカヤ、オオイヌノフグリ、：数えあげればきりがない。

これらは何れも厄介な雑草であり、古代から生えていた野山のなつかしい草花を駆逐してまで生え茂っている。以前はよく路傍などにも見かけたオキナグサや湿地に生えていたサギソウなどは全く姿を消してしまった。その他にも幼い頃に摘み草したなつかしい花の数々が、今私たちの目の前から姿を消しつつある。帰化植物が昔の植生を変容しているのである。

6 名前の由来のおもしろい植物

人それぞれに命名の由来があると同じように、植物の名前にも命名のいわがある。

一般的なものでもホタルブクロ（チヨウテンバナ）、ヒトリシズカ、フタリシズカをはじめ、才媛紫式部の美貌にあやかってかムラサキシキブ（秋冬の果実の色は鮮かである）など人の名を借用したものもある。

美しい花なのに茎や葉の悪臭のために命名されたヘクソカズラは迷惑千万であろう、しかし葉を少しもんで嗅ぐといやはや名前のとおりである。あまりにも可愛うなうので

五、六月に咲く花なので一名サオトメバナともいう。早春に道端や日当たりのよい畠などに、屋のような可憐な



No. 73 図 ヘクソカズラ

花を咲かせるイヌノフグリ、オオイヌノフグリも氣の毒である。フグリとは卵丸のことで、果実の形が犬のそれに似ているからである。乙女の瞳のような澄んだ花を咲かせる草なのに……。
ミズヒキは夏の花である。細い組状に咲く花は、上から見ると紅色であり、下から見ると白色花、そのため紅白の紐状の花序に水引きに見立てたものだらう。

ヤブガラシはいたるところのやぶや垣根、時に廻屋など

にからみついている。やぶを枯らして盛んに繁茂するから

だが、一名ビンボウカズラともいう。この草が他の植物の

上に繁って山林を枯らし、そのために家が貧乏となるとい

う意味である。

キセルのがんくびに似た花の咲くガンクビソウ、お粗末な牛の尻っぽに似た花穂をつけるウシノシツベイなど：植物名の由来は片っぽしから意味深く、興味のうちにその植物の特徴なども把え、観察の眼も肥えてくる。

7 可憐な野草はまだ残っている

古代から私たちのふるさとに咲き続ける、愛すべき山野草はまだ残っている。それらを見つけ出すことも郷土の良さを確認することになる。自分の足で歩き、自分の目で見つけよう。

先にも述べたハンショウズル、ツクバネウツギの他に草本ではミヤマウズラ、イチャクソウ、キンラン、ヒトリシズカ、ギンラン、ジュウニヒトイ、チゴユリ、リンドウ、センボンヤリ、モジズリ（ネジバナ）、ツルボ、キキョウ、オケラ、アキノキリンソウ、オミナエシ、ホタルカズラ、アマドコロなどがある。

樹木ではゴンズイ、ツリバナ、ニシキギ、マユミ、ウグイスカグラ、キツネヤナギなどさがせば案外多い。

六、結び

〔お爺さんは山へ柴刈りに〕

古代の人びとは森に鳥獸を狩り、柔らかな葉や果実、貯蔵根などを集め、また水辺に魚や貝などを求めて生活した。この時代、森は人間にとて生活物資の供給地であり、また居住の地であった。緑の植物の無いところに人間の生活はなかつた。

道具を使い、火を利用することを覚えた人間は、定住して農耕生活を営むようになる。それには豊かな土地が必要である。その土地は、当時一面に繁茂していた常緑照葉樹林を壊すことによって得られた。森が永年かかって蓄えてきた地力を農業に利用することである。農地がやせてくれば、地力の補強のため、森林から落ち葉や、下草を集め、農地に入れてやることが始められた。即ち堆肥製造による有機質肥料作りである。そのため農家のひとたちは近在の里山へ落ち葉取りや柴刈りにいったものである。

「お爺さんは山に柴刈りに」は、まさに農家の日常の姿だったものである。

このため里山林は、我が身を削って農地に貢いだため、やせて生産力を失ってきた。地力低下のため、その土地古來の森林は生き続けられず、やせ地にも耐え得るコナラやアカマツの林に変わつていった。

二、物が栄えて山林滅ぶ

里山林での落ち葉取りや柴刈りは、昭和三〇年代まで続いていた。しかし物資が豊かで、科学の進歩による化学肥料は、落葉堆肥を必要としなくなり、石油やプロパンガスは農村からも薪や柴をしめ出した。お爺さんは山へ柴刈りにいかなくともよくなつた。すなわち、化学肥料、石油やプロパンガスなどの燃料の普及のおかげで、マツ林が除々に肥沃化はじめた。

これは先にも述べたようにマツ林の滅亡への一因になるわけである。松林が是非とも必要であれば、それを維持する手段を考えねばならない。それには松林の下草刈りや落ち葉集めによって、松林の収奪をくり返すことである。お爺さんが山へ柴刈りにいけばよいのである。物が豊かになつたので今更そんな事は出来ない。風致林などでも伐採、落葉の採取禁止であった。そのため松林の肥沃化は一層進み、シイやカシの照葉樹林への遷移の速度を早めたのである。

これに拍車をかけたのが、マツノザイセンチュウとマツノマダラカミキリの相利共生のしわざである。マツノザイセンチュウが、マツの樹脂道の中で大繁殖して、マツの樹液流を止める。マツノマダラカミキリは枯れたマツの樹皮下で幼虫期を過ごし、翌年初夏に成虫となつてマツから飛び出す。この時、身体に線虫をたくさんつけており、元気

なマツの新梢を餌としてかじる時、その傷口からマツの体内へ線虫を侵入させる。線虫はマツの体内で大繁殖してマツを弱らせる。弱ったマツにカマキリが卵を産み、やがて枯れたマツの中で卵からかえったカマキリの幼虫は、樹皮下を食い荒して生長し、成虫となって飛び出す。このからみ合いが年々くり返されるが、一方ではカマキリの幼虫の入っているマツの枯木を焼き捨てるなどの処分もしないままに放置されていたから、マツ枯れの被害は拡大する一方であった。

今、長者平に立つてみると、目の届く限りマツ林は姿を消した。

再びシイやカシ類などの繁る常緑照葉樹林へと、歴史はくり返すだろうか。

「或る人は叫んだ。

『マツ林が消えたのは、人間が働らかなくなつたからだ。』

大きな警告として受けとめてみたい。（野原幸之助）

遺跡の発掘に参加して

姥ヶ谷遺跡併句抄

前 島 道之助

業員の誰もの顔が未知への期待で真剣そのものであった。生い茂った雑草の匂いがむっと鼻をつく。

「芒風青し風土記の丘を掘る」 長路

玉造町は霞ヶ浦の波打ち際に、西に筑波山を遠望する地
域遺跡地名表」（昭和五〇年版）とある。埋蔵文化財包
藏地の城館跡に属するもので、今般、総合運動場建設用地
として、遺跡の広範囲にわたる部分が町民のために活用さ
れることになったので、町教育委員会は緊急発掘調査を実
施することになり発掘委員としての依頼を受け参加した。

調査終了後主任調査員海老原幸先生からその趣味を活かし
た文章をもって、調査報告書の中に全く異例の一頁をとの
お話しをつけ、元来その任でないのを重々承知しながら取
り急ぎ御厚情の万分为一の協力をすることによりその責を
ふさがせて頂きたく秃筆をとった。

「夏草にむせつ城館跡を歩く」 長路

五月十四日朝現地につく。運動場整地のブルトーラーが
唸りを立てて活動している光景は現代のたくましい息吹き
そのものである。発掘現場の林の中に足を踏み入れ、海老
原先生の指導の下に雑木、雑草を片付け、トレーンチの設定
をする。シャベル、スコップが処女地に食い込む一瞬、作

「夏草や。午餉まぶしき握り飯」 長路

二日、三日と好天に恵まれ誰も彼もがふと汗ばむ程の
暑さで心地よく、作業熱心な婦人達も晴れた明るさにつら
れて屈託のない笑いと冗談に話が弾む。小さな上器のかけ
らでもこの上ない貴重品として受けとめ、みんな古代への
空想に胸をふくらませる。やがて正午だ、御婦人方持参の
握り飯、漬け物の美味しかったこと、野外で食べたその味
は今になんとも忘れられない。

「一作業終り団欒の氷水」 長路

三時のお茶だ。作業中時折見廻り指導する海老原先生。
冗談をとばしながら手助けする八木公民館長さん。ブッ
カキ氷水の腹にしみる涼気は格別で、軽い疲れもすうっと
消えて元気回復。海老原先生の補佐役高楚栄治君にお嫁さ

んの世話をしようなどと、眞面目と冗談とでもごもの話も出る。

「汗淋漓掌に愛はしむ土師、須恵器」長路

「須恵器出て風土記のころの鬼蘇」長路

住居跡らしい場所である。土師器片と須恵器の硬そうな破片がこもどもに発見される。それに誰もが大事そうに手を触れる。まるで宝石でも持つようだ。額から流れる玉の汗も陽光に光る。傍の藪に鬼蘇が一輪ひっそりと咲いて美しい。この野草は遠く古代の「古事記」「常陸風土記」の書かれた頃から、或いはそれ以前から咲いていたのかも知れない。その鮮かさは、又珠玉の輝きで出土須恵器の地味な味わいとは対象的であった。

「日盛りや國祖柄みし竈前」

長路

発掘場所を、整地した野球場に移した。浦風が田を渡り、野を越えて正面に吹きつける影一つない炎天作業である。暑いな、などと咳きながらも、いま金の茶釜が出るゾなどと気軽な冗談に笑いながらもシャベルを動かす手は休めない。、

珍中の逸品と先生の折紙付き、副主任格の高埜君の土師器、須恵器に関する話など野外講話は感銘深い勉強会であった。ともあれ一週間に及ぶ発掘作業に発加した一同は、誰もが和気藹々に実地の学問をしたことになり、これは生涯又とない有意義な体験であったと思う。尚、小稿は遺跡発掘に關する触目吟である為に歴史語を文中に多く用いたことを反省しつつベンを擱く。

発掘に思う

成島謙二

発掘場所を、整地した野球場に移した。浦風が田を渡り、當時の飲料水には、あえて「母なる泉」と言える泉の天竜の御手洗がある。これは千二百数十年昔に書かれた常陸国風土記の椎井の池である。しかもこの泉を水源として、次第に低地へ水田をもとめて行つた弥生時代の様子が、丁寧に二回も繰返し書かれている。山の上に夜刀神を祀り、今は水源が涸れ量が少ないが、三十年程前迄は物凄い湧出量で、恐ろしくて近寄れない程でまさに神代の昔から動かぬ証拠にふさわしかつた。今回の発掘調査は、その泉と姥ヶ谷池に挿まれた長者屋敷という伝説もあり、古代からの歴

「五月晴れ瓢尊き野の講話」

長路

史を秘める原地区の台地である。旧文化遺産が、町総合グランドという新文化財に生まれ変わるについて、町が行ったもので、指導者として斯道の権威海老原幸先生の卓越した識見と地域の多数の方々の力によって、多大の成果を納めることができたことに感謝し、又発掘の衝に当たられた方々、特に沖洲の高埜栄治君が学生時代の研究と経験を生かしての御協力、御多忙中汗を流して協力くださったお母さん方に厚くお礼を申し上げる次第です。ことに今迄全く例のなかつた飛鳥奈良時代の住居跡が確認出来、「かまと」や土師器、須恵器の破片が多量に発掘され、土器の数点が高埜栄治君の手によって復元されたことは、今後の玉造の歴史解明に大きな手掛けとなること確信いたします。

楽しかつた発掘作業

齊藤きみ

玉造町先住民遺跡発掘の話があり、私達綠丘婦人会も参加することになり、社会科の勉強も兼ねて、半人前の仕事しか出来ない同志が、ねむい目をこすりながら自転車で泉まで通いました。毎日土との戦いでいた。黒土、赤土、粘土と色別を覚えたり、スコップ、移植ゴテ、竹べら、何に使用するのか、不思議な道具が沢山あって驚きの毎日でした。汗にまみれ、土にまみれて、何が好きでこんな事やるのだろうと、ふと考える事もありましたが、何かひかれるものがあつて通いつづけました。けずり過ぎて大目玉の日

沢山の先生始め各婦人会の友達と苦楽を共にして、大事業を成功させて本当に嬉しく思います。
皆様にはいろいろ御世話様になりました。

遺跡の発掘作業に参加して

国府田はつ

区長さんからこの仕事のお話を伺い、アルバイトのつもりで始めた私でしたが、仕事に出掛け、先生方のお話を伺うにつれ、改めてこの仕事の重大さを感じました。仕事は山での笹刈りや、堅い土掘りなどの単純作業ではありましたが、次第に興味もわき、出土の期待を持ちながら先生方の指導のもと、作業に取り組みました。また掘り続けて色々

の違う上に迷った時や、土器などにふれた時には、今までの疲れや暑さも忘れて何とも言えない気持ちがしました。今、発掘を終え、やり遂げた充実感や、短い間ではありますがあが、この仕事にたずさわることができてよい勉強になりました。

自宅へ帰って家族を交えてその日一日の作業内容や先生方からの御講義などを話し合い、遺跡発掘の興味を益々深くしています。

これもひとえに海老原先生や野原先生を始め諸先生方の献身のご指導の賜と深く感謝しております。また、成島先生からは、貴重な資料を頂き、ありがとうございました。

原遺跡発掘に参加して

玉造町緑ヶ丘 古 森 喜恵子

遺跡の発掘をすると聞いて、前に家族で登呂遺跡へ行つたこともあり、前から一度やつて見たいと思つておりましたので、近所のお母さん達を誘つて参加しました。

先人の使用したお椀や、勾玉も出ることがあると聞き、期待に胸をはずませながら発掘調査に加わりました。海老原先生や町の各地から有志のみなさん、教育委員会の先生方と共に共同作業が行われました。霞ヶ浦の見わたせる枯松の林の長者館で発掘がはじまりました。

メージャーで区画が測られ、篠や雑草が刈り取られ、私達は、持ち区が決められ、唐鍬で表土を起こしはじめると、質のやわらかい土器、固くて薄いロクロの痕のある土器のかけらが出ました。成島謙二先生にお聞きしましたら、「須恵器ですね。」と教えて下さいました。内側が黒いもの、外側の黒い土器も出ました。

高塙栄治さんは、斜面を利用した登り窯で焼いた土器と思われますと説明がありました。土の色の変化に気をつけながら、移植ゴテでけずる様にしながら少しづつ掘り下げました。休けいの時は井戸水の水水が格別おいしかったです。

B 地点野球場わきの駐車場での発掘は、四十センチ程埋め立て、固めた土を、唐鍬や万能で掘り起こしました。

若妻会の人達と一緒に作業した日曜日の午後、出入り口方向へ、拡張作業が行われた。

地元消防団の人達も発掘作業に加わり、固い土の掘り起しもだいぶすゝみ、上器のかけらも次第に数を増しました。土器を頂点とした土の柱が林立し、遺跡の発掘らしさも最高潮になりました。海老原先生の指導も熱を帯び、能率をあげること、慎重に発掘する様に指示された。照りつけの陽射しもまぶしく、たくさんの土器が出土した中で「どうやら昔人の住んでいた形跡と思われます」と説明があり

ました。かまどらしいものも出てきました。

泉の井川芳男氏所蔵の「こしき」といわれるものを見せていました。外部には、みがきの痕があり、把手もありました。ほゞ完全な姿で保存されており、すばらしい先人の遺産です。

昼食には、早起きして蒸かした赤飯を杉の大木の影で婦人会の人々と持ち寄りの自然食のおかずで先人をしのびながら食べました。

海老原先生が出土した土器の位置と深さを図示されるため、測量と収集が行われました。

土器のかけらに掘り出した時の深さを鉛筆で書き入れ、割れたものには印をしました。土器と土の柱が次第に取りのぞかれ、粘土質の固い地面が出来ました。移植ゴテで少しづつ削りとると柱の跡が四ヶ所出ました。

かまどもはつきり姿をあらわし、行方郡ではじめてとう住居跡の発掘に成功したのでした。多勢の人の力が実を結びました。

暑い日差しの中、固い土を掘りおこしたり、なれない仕事でつらいこともありましたが、先生方の御指導のもと、

土器のことを知り、野原幸之助先生から植物についても教えていたとき、共同作業で、多くの人とのふれあいの中で、私自身学ぶ事の多かったことを感謝しております。

発掘作業に思う

玉造町中央公民館長

八木 豊

昭和五十七年五月十四日八時三十分、渡辺教育長をはじめ、関係者全員が集合して発掘作業が始まった。以下、作業の様子や感想を俚謡に託してみた。

一、何故に知ったか 千年前の

古人生活の かまど掘り

一、古人偲んで かまどの前に

焚火したかと うずくまる

一、誰も知らない 場所からかまど

聞けば千年 前のもの

一、誰が付けたか かまどの中へ

古人偲んで 火をもやす

(海老原先生より)

一、無知な館長 発掘作業

掘れば良かと 汗流し

(八木より海老原先生を)

一、無知な人夫で 神経使い

作業現場を 西東





発掘作業のようす 1
(渡辺教育長のあいさつと海老原先生の諸注意)



発掘作業のようす 2
(海老原先生、見事な手ほどき)



発掘作業のようす3
(雨の日の学習会)



発掘作業のようす4
(平板実測の並木さん、レベルを見る岡本先生)



発掘作業のようす5
(トレンチを設定し、発掘にはげむみなさん方)



発掘作業のようす6
(作業にも慣れ、移植ゴテの手さばきも軽やか)

発掘作業のようす7
(7つ道具をたくみに操る
海老原先生)



発掘作業のようす8
(土の変化に気づき、何かあっ
たかと緊張するおかあさん方)



編集後記

私たちの住む玉造町は、遠い昔から自然環境に恵まれておらず、それぞれの時代の様々な生活の足跡を残しております。

このたび発掘調査を行いました原遺跡一帯も、乳母（姥）の懷に抱かれたような温暖な地で、早くから文化が開けました。

数千年前と思われる「織維土器」も出土しております。

「長者平」とも称されるこの地から精巧な「須恵器」も出土し、付近からは「布目瓦」も発見されており、その名にふさわしい人もいたであります。

若舎人部広足の歌（万葉集）に「さきむりに発たむさわぎに家の妹が業るべきことを言はず来ぬかも」とあるように防人となつてこの地からはるばる筑紫國（北九州）へ妻子を残して赴いた人もいたであります。

遺跡の前に佇むと、私たちの遠い祖先の謡音が聞こえてくるような気がして往時が偲ばれます。

しかしながら、「松風のさゝやき」さえも聞かれなくなつた今日、その息吹がだんだん薄れていくような気がしてなりません。

昔から村に伝わる一本の樹、湖水を渡るそよ風、遠くに見えるお寺の屋根……こうした自然と歴史が一体となつ

た景観（歴史的環境）を私たちは大切にしていかなければなりません。

こうした環境が私たちの心にやすらぎを与え、地域の文化もこれを基盤として芽ばえ、育っていくのではないであります。

開発もまた大切なことは申すまでもありません。都市化傾向の波の中で、歴史的環境を守るために、単なる保護よりむしろ、積極的に創造することが大切であると思います。

私たちに課せられた責務は要するに、人間が生きるにふさわしい地域社会をいかに創造していくかということではないでしょうか。

本発掘調査は色々な意味で困難をきわめましたが、それでもかわらず短期間のうちに大きな成果をあげることができましたことは、海老原幸先生の献身的な御努力の賜に他なりません。

連日、夜を徹してのお仕事ぶりを今でもよく思い浮かべます。心から敬意を表します。

また、本報告を少しでも多くの町民の皆様に親しまれるものにしたいという先生の御配慮のもとに、野原幸之助先生、高塙栄治さんが、それぞれ原稿をお寄せくださいました。お蔭さまでユニークな報告書ができましたことを皆様とともに喜びたいと思います。

更に、本遺跡が心ない仕打ちによって消失することのないよう守り続けてこられました並木亨様はじめ、地元の皆様、そして、発掘作業に御協力いただいたシルバー会の方々をはじめ、多くの皆様に対し厚く御礼申し上げます。

さぞ、作業等を通して、遠い祖先の生活を肌で感じられ、貴重な体験をなされたことと思います。
一方、町当局といたしましても、渡辺教育長自らが鍼、万能をふりかざして作業に直接たずさわるという真摯な態度と町民の皆様の温かい御理解とあいまつたことが今回の成果につながったものと思います。

最後に、本発掘のために蔭に陽に御指導いたいた県文化課及び鹿行教育事務所の先生方に対し心から御礼申し上げるとともに、町民総ぐるみで文化財についての認識をより一層深め、大切にしていきたいと思います。
今回出土した貴重な数多くの資料は、皆様方の精神をくんで、よりよく保存、活用を図っていきたいと思います。
同時にこの小冊子が町民の皆様方にとって郷土の歴史、文化を知る上で、少しでもお役に立てばと念願いたしております。

(川島先則)

発掘調査関係者名簿（敬称略）

○團長 渡邊 正則（玉造町教育委員会教育長）

○調査主任 海老原 幸（鹿行文化財保護連絡協議会長）

○調査員 堤 一郎 前島道之助 成島 謙二
野原幸之助 並木 亨 高楚 栄治

○協力員 小沼 義幸 岡本 保 新堀慶一郎
井川 芳男 大塙 正康 成島 一夫

○作業員 斎藤 キミ 武井りつ子 滝崎まさ子
石田はつ子 今泉 とき 杉山 キミ
国府田はつ 細谷とよ子 堀 マキ
小林 芳江 古森喜恵子 代々城かね
松本登志子 高崎 令治 滝崎みち子
渡辺 俊子 渡辺 次子 高崎ミヨ子
田神 正江 大塙美代子 飯島 久子
大場 広子 飯島 さよ 成島 和枝
大場久美子 橋川みさ子

○事務局

高野 博	八木 豊	田山 信男
稻葉 ヤイ	鈴木 亮然	若泉 亨
茂木 要一	栗又 敏治	川島 先則
石川 茂二	田宮 光江	中野 正史
石田 泰雄	高塚喜代子	池島 正夫
並木寿美子	館 ひろ美	斎藤ふさ江

原遺跡発掘調査報告書

発行日 昭和五十七年十二月二十五日

発編行集 茨城県行方郡玉造町甲四〇四

玉造町教育委員会

教育長 渡邊正則